広島県三次市文化財調査報告書　第10集

四拾貫小原第16号古墳・下山南遺跡発掘調査報告書

2017年

三　次　市　教　育　委　員　会
特定非営利活動法人 広島文化財センター

例　言

1　本報告書は，昭和 54 年度に実施した下山住宅団地造成工事に係る四拾貫小原第 16 号古墳及び下山南遺跡(※)の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，三次市教育委員会が三建工業株式会社から委託を受けて次のとおり実施した。

期　間：　昭和 54(1979)年 4 月 18 日から昭和 54 年 6 月 16 日

担当者：　三次市教育委員会教育長　田辺二郎

〃　　社会教育課長　竹岡幸雄

〃　　社会教育課係長　谷川信明

〃　　社会教育課主事　中村芳昭

調査協力　福井万千(広島県立歴史民俗資料館)　　(所属等は当時)

3　整理作業・報告書作成については，出土遺物の実測及び図面の基本的な整理は中村芳昭・加藤光臣が行い，中村芳昭(Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ)，桑原隆博(Ⅱの一部)，加藤光臣(Ⅱの一部)が執筆し，遺物写真撮影，遺構・遺物トレース，図版作成，編集等の整理作業・報告書作成業務のほとんどは，三次市教育委員会との委託契約により特定非営利活動法人広島文化財センターが三次市教育委員会の指示・監理のもとで実施した。

また，四拾貫古墳群については，現地確認調査を加藤光臣，立畑春夫，中村芳昭が行い，加藤が整理した。

4　本書で使用した遺構等の表示記号は，土坑＝ＳＫである。

5　挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。

6　本書に使用した方位は磁北である。

7　本書に掲載した，第 1 図は国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図（三次・三良坂)，第 2 図は三次市の三次市都市計画図の 2,500 分の 1 の，それぞれの一部を使用した。

8　調査及び報告書の作成に当たり次の方々，機関より御指導・御教示をいただいた。記して謝意を表したい。(敬称略)

伊藤実，小都隆，加藤光臣，桑原隆博，三枝健二，妹尾周三，濵岡大輔，福井万千

向田裕始，山田繁樹，脇坂光彦

三建工業株式会社，広島県教育委員会文化課(現文化財課)，三次市文化財保護委員会

9　発掘調査の記録類及び出土品は三次市教育委員会において保管している。

※遺跡名称について，発掘調査時は「下山遺跡」として届出等を行ったが，広島県住宅生活協同組合の四拾貫住宅団地造成に伴い発掘調査された遺跡と同名であり，既に報告書が刊行されていることから，本報告書刊行に当たり「下山南遺跡」と改める。

(広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』1980 年)

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 10

Ⅳ　遺構と遺物 …… 10
　1　四拾貫小原第 16 号古墳 …… 10
　2　下山南遺跡 …… 30

Ⅴ　まとめ …… 32

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡分布図 …… 4
第 2 図　四拾貫古墳群分布図 …… 5
第 3 図　周辺地形図 …… 11
第 4 図　四拾貫小原第16号古墳墳丘測量図 …… 12
第 5 図　四拾貫小原第16号古墳墳丘断面図 …… 14
第 6 図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室平面図 …… 15
第 7 図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室実測図 …… 18
第 8 図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室遺物出土状況図（1） …… 19
第 9 図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室遺物出土状況図（2） …… 22
第10図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（1） …… 23
第11図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（2） …… 24
第12図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（3） …… 25
第13図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（4） …… 26
第14図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（5） …… 27
第15図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（6） …… 28
第16図　積石塚墳丘実測図 …… 29
第17図　積石塚土坑実測図 …… 30
第18図　土坑１・２実測図 …… 31

表　目　次

第１表　四拾貫小原第16号古墳出土土器観察表……34
第２表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄釘観察表……37
第３表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄器観察表……38
第４表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄滓一覧表……38

図　版　目　次

図版１　1. 遺跡状況 (北西から）
2. 古墳全景（北東から）
3. 古墳全景（北から）
図版２　1. 古墳全景（西から）
2. 古墳墳丘（南西から）
3. 古墳墳丘（南から）
図版３　1. 古墳全景（前庭部　南東から）
2. 古墳全景・外護列石（東側　南東から）
3. 古墳全景・外護列石（西側　南東から）
図版４　1. 横穴式石室（南から）
2. 横穴式石室（天井石　北から）
3. 墳丘土層断面（石室奥壁側　北から）
図版５　1. 墓坑掘方（奥壁裏　西から）
2. 石室前庭部遺物出土状況（南から）
3. 石室羨道部遺物出土状況（南から）
図版６　1. 石室羨道部遺物出土状況（東から）
2. 石室羨道部遺物出土状況（南から）
3. 石室羨道部長頸壺出土状況（東から）
図版７　1. 石室玄室部遺物出土状況（南から）
2. 石室玄室部遺物出土状況（西から）
3. 石室玄室部奥壁側遺物出土状況（南から）
図版８　1. 石室玄室部鉄釘出土状況（南から）
2. 石室玄室部棺台石検出状況（南から）
3. 石室玄室部完掘状況（南から）
図版９　1. 積石塚全景（西から）
2. 積石塚４分割全景（西から）
3. 土坑検出状況（積石外縁あり　西から）
図版 10　1. 土坑（礫群あり　西から）
2. 土坑（礫群あり　北から）
3. 土坑完掘（積石外縁あり　北西から）
図版 11　1. 土坑完掘状況（東から）
2. 積石下の断割り状況（南東から）
3. 土坑１土層断面（南から）
図版 12　1. 土坑１完掘状況（南から）
2. 土坑２完掘状況（東から）
3. 土坑２完掘状況（北から）
図版 13　出土遺物１
図版 14　出土遺物２
図版 15　出土遺物３
図版 16　出土遺物４
図版 17　出土遺物５
図版 18　出土遺物６
図版 19　出土遺物７
図版 20　出土遺物８
図版 21　出土遺物９
図版 22　出土遺物 10
図版 23　出土遺物 11

Ⅰ　はじめに

四拾貫小原第 16 号古墳・下山南遺跡の発掘調査は，民間企業の住宅団地造成に伴って実施したものである。

昭和 54（1979）年２月に住宅団地造成を行う事業者の三建工業株式会社と，三次市四拾貫町字下山の現地で，事業内容・造成範囲の確認等の協議を行い，造成地内の埋蔵文化財の確認を行った結果，古墳１基と中世の墳墓とみられる遺跡を確認した。

この遺跡の取扱いについて協議したところ，現状保存は困難であるとのことから発掘調査を行い記録保存を図ることとなった。

昭和 54 年４月 10 日付けで，事業者である三建工業株式会社と三次市教育委員会とで，４月 18 日から５月 31 日までを調査期間とする発掘調査委託契約（書）を締結した。

事業者の三建工業株式会社は，４月 16 日付けで文化財保護法第 57 条の２の規定にもとづき，文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘の届出を行った。一方，三次市教育委員会は４月 16 日付けで文化財保護法にもとづき発掘調査届を文化庁長官に提出した。

三次市教育委員会は，４月 18 日から発掘調査を開始した。しかし，古墳が横穴式石室であり，規模が大きく，遺存状況が良好で遺物が多量であったことなどから，予定した調査期間では調査が終了しないことが判明したため，平成 54 年５月 31 日付けで調査を６月 16 日まで延長する発掘調査契約変更（契約書）を三建工業株式会社と三次市教育委員会の間で締結した。

この発掘調査は，６月 16 日に終了した。

発掘調査に当たっては，三建工業株式会社，有限会社叶商会の協力を得るとともに，広島県教育委員会，広島県立歴史民俗資料館から指導・協力，また，地元を始め多くの方々から協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

Ⅱ　位置と環境

四拾貫小原第16号古墳・下山南遺跡は，広島県北部の三次市四拾貫町字下山に所在する。

遺跡の所在する三次市は中国山間地に位置し，周囲を中国脊梁山地の一部である備北山地や世羅台地などの高原・台地に囲まれ，市域のほぼ中央に東西約40㎞，南北約25㎞の三次盆地（標高150ｍ）が広がっている。この三次盆地の中央では，中国山地や世羅台地に源を発する江の川（本流，広島県では別名「可愛川」），馬洗川，西城川，神野瀬川が四方から流れ込み，合流して中国山地を横断（江の川関門）して島根県江津市で日本海に注いでいる。

三次市は，中国地方のほぼ中央に位置し，古代から交通・交易，文化の要衝地として瀬戸内海沿岸部と山陰地域を結ぶ内陸の中核都市として発展し，現在も中国自動車道と中国横断自動車道尾道松江線が交差し，また多くの国道・県道などの道路網が四方に広がるなど，交通の要衝である。こうしたことから物資や文化など古代から交流も盛んであったと考えられ，これまで数多くの遺跡が確認され，広島県内の遺跡の約３分の１が存在し，全国的にも遺跡密集地の一つといえる。なかでも馬洗川流域は三次盆地の中でも古墳をはじめとして最も遺跡の密集する地域である。

旧石器時代　下本谷遺跡（西酒屋町），段遺跡（四拾貫町），和知白鳥遺跡（和知町）ではナイフ形石器などが出土しており，これらは姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）降灰に先行する時期のもので，後期旧石器時代初頭から中期旧石器時代に遡る可能性が指摘されている。その他，下山遺跡（四拾貫町）など，旧石器の遺跡が多く確認されている。

縄文時代　松ヶ迫Ｂ地点遺跡（東酒屋町）では早期の小形竪穴住居跡を検出し，楕円押型文土器，石器，下本谷遺跡では楕円押型文土器，元国遺跡（粟屋町）では後期の土器，石器が出土している。また，松ヶ迫Ａ地点遺跡，緑岩遺跡（南畑敷町）や松尾徳市遺跡（東酒屋町）では動物狩猟用と考えられている土坑（落とし穴）が複数調査されている。

弥生時代　集落跡としては，前期の高蜂遺跡（南畑敷町）では縄文時代晩期の突帯文土器と前期の遠賀川式土器が出土している。中期には，鍛冶作業の推定されている住居跡が調査された高平遺跡（十日市町），10軒以上の竪穴住居跡や加飾性に富んだ土器（塩町式土器）が出土した塩町遺跡（大田幸町），勇免遺跡（大田幸町），岩脇遺跡（粟屋町）など集落跡が増加する。後期には高杉段遺跡（神杉町）や岡竹遺跡（十日市町）などで竪穴住居跡が調査されている。

墳墓としては，前期の高平Ａ号墓（十日市町），松ヶ迫矢谷遺跡（Ｄ地点）（東酒屋町），中期には四隅突出型墳丘墓の陣山墳墓群（向江田町），宗祐池西１・２号墓（南畑敷町），殿山38・39号墓（大田幸町）や貼石方形墓の四拾貫小原遺跡（四拾貫町）など，後期には，墳丘墓と溝で区画された墓域の花園遺跡（十日市町）や吉備型の特殊器台・壺が出土し前方後方形をした四隅突出型墳丘墓の矢谷ＭＤ１号墓（史跡「矢谷古墳」東酒屋町），岩脇遺跡などがある。

古墳時代　集落跡としては，前期では三段畑遺跡（糸井町），畿内系土師器が出土した旭堤下層遺跡（三次町）などがある。中期以降では調査例が増加し，和知白鳥遺跡，三重１号遺跡（四拾貫町），松ヶ迫Ａ・Ｂ・Ｆ・Ｇ地点遺跡など，大規模な集落跡が明らかになり，鍛冶炉など，鉄生産に関

わる遺構を伴うものが多い。また，須恵器生産の松ヶ迫窯跡群（東酒屋町）などがある。

古墳は三次地域で約4,000基が確認されている。前期の古墳は不明瞭であるが，前方後円墳の若宮古墳（十日市町），岩脇古墳（粟屋町）などが遡る可能性がある。中期になると，宮の本第24号古墳（向江田町）は墳丘全面に葺石があり，92本の埴輪が廻る畿内的な古墳が築造される。一方，箱山第３～６号古墳（向江田町），権現第１～３号古墳（向江田町），下山手第４・５号古墳（向江田町）などの小型の古墳も築造される。また，大型帆立貝形古墳の糸井大塚古墳（糸井町），酒屋高塚古墳（西酒屋町）や大型円墳の浄楽寺第12号古墳（高杉町）などの大型の古墳が築造されるとともに，四拾貫古墳群（約140基），浄楽寺古墳群（117基，高杉町），七ッ塚古墳群（60基，高杉町・小田幸町）などの古式群集墳が形成される。後期には勇免第４号古墳（大田幸町），久々原第６号古墳（西酒屋町）などの小型の前方後円墳や緑岩古墳（南畑敷町），上四拾貫古墳群（四拾貫町），掛原下第７号古墳（南畑敷町）などの竪穴系の埋葬施設の中・小型の古墳が引き続き築造されるが，後半には横穴式石室が築造される。三次地域では６世紀前半頃の若屋第９号古墳（粟屋町）が最も古く，６世紀後半以降には粟屋高塚古墳（粟屋町），大仙大平山第22号古墳（向江田町），天狗松第４～６号古墳（東酒屋町），寺側古墳（三若町），宗祐池西第21号古墳（南畑敷町）などの横穴式石室の古墳が築造される。また，柄香炉形土製品が出土した門田敦盛第４号古墳（東酒屋町）は７世紀中頃，和知白鳥第１～３号古墳は７世紀後半頃と考えられ，幅の狭い小型の横穴式石室が築造されるなど，横穴式石室の構築，追葬が行われている。

古代　三次郡の郡衙跡と推定されている下本谷遺跡，『日本霊異記』に記載の三谷寺に比定されている寺町廃寺跡（向江田町）や上山手廃寺跡（向江田町），寺戸廃寺跡（三次町），また，寺町廃寺跡に瓦を供給していたとされる大当窯跡（和知町）がある。その他，大型の掘立柱建物跡群が調査された向江田中山遺跡（向江田町）は官衙的な性格の遺跡と考えられ，炭窯や製鉄関連の土坑が調査された南山遺跡（有原町）などの遺跡がある。

中世　鎌倉時代の様子はほとんど分かっておらず，南北朝期以降，三吉氏及び広沢氏（後の和智氏，江田氏）の動向として史料にあらわれるとともに，遺跡が遺されている。三吉氏は比叡尾山城跡（畠敷町）を長く居城としたが，戦国末期に比熊山城跡（三次町）に居城を移した。美波羅川流域に位置する旛返山城跡（三若町）は江田氏の居城である。祝（武田）氏の居城である高杉城跡（高杉町）は水田地帯に築かれた堀を有する平城である。その他，広沢氏が地頭職入部当時の築城と考えられている古城山城跡（和知町），天城山城跡（和知町），陣山城跡（和知町）や井上佐渡守土井屋敷跡などがある。また，山崎遺跡（大田幸町）では呪いの墨書銘のある円札等が出土し，また，菅田遺跡（向江田町）では青磁の壺が出土している。

【参考文献】

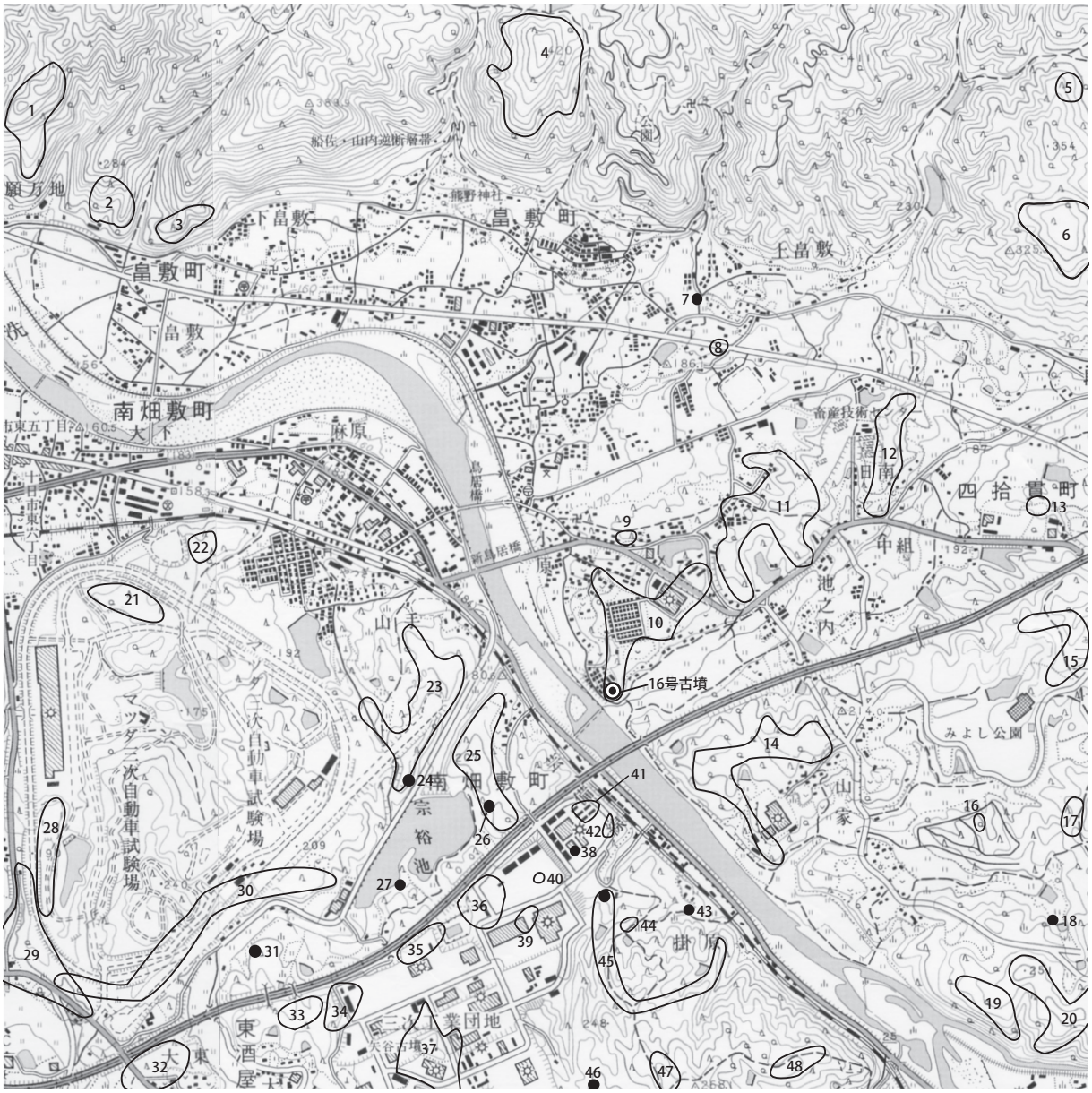
広島県教育委員会『広島県遺跡地図』（電子版）

広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第５篇（広島県双三郡三次市史料総覧刊行会）1974年

広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第４集1996年

三次市史編集委員会『三次市史Ⅰ（通史）』・『三次市史Ⅱ（資料）』（三次市）2004年

※各遺跡にかかる報告書等は省略した。



1.福谷山城跡　2.願万寺古墳群　3.二本松古墳群　4.比叡尾山城跡　5.弘法谷北古墳群　6.ハチガ壇城跡
7.畠敷遺跡　8.井上佐渡守土居屋敷跡　9.宮田古墳群　10.四拾貫小原古墳群　11.四拾貫太郎丸古墳群
12.四拾貫日南古墳群　13.三重古墳群　14.山家古墳群　15.堂の奥古墳群　16.狩又遺跡
17.神田谷古墳群　18.山家遺跡　19.日野目古墳群　20.神山古墳群　21.黄幡古墳群　22.黄幡東古墳群
23.宗祐池西古墳群　24.宗祐池西遺跡　25.宗祐池東古墳群　26.宗祐池２号遺跡　27.宗祐池遺跡
28.善法寺古墳群　29.下本谷東遺跡　30.天狗松北古墳群　31.松ヶ迫第１号古墳　32.天狗松南古墳群
33.松ヶ迫Ｅ地点遺跡　34.松ヶ迫Ｆ地点遺跡　35.松ヶ迫Ｂ地点遺跡　36.松ヶ迫Ａ地点遺跡
37.松ヶ迫矢谷遺跡　38.緑岩古墳　39.高峰遺跡　40.高峰東遺跡　41.掛原Ａ地点遺跡　42.緑岩遺跡
43.掛原Ｂ地点遺跡　44.掛原下遺跡　45.掛原下古墳群　46.来源山古墳　47.掛原古墳群　48.下来源古墳群

第１図　周辺遺跡分布図(1：25,000)

第２図　四拾貫古墳群分布図(1：6,000)

※○(白抜き)印は消滅した古墳を示す

四拾貫小原古墳群規模一覧

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
1	円形	8.5	1.5 ～ 1	周溝・企業用地造成で消滅	1
2	円形	9.5	1.6	企業用地造成で消滅	2
3	円形	16	2	企業用地造成で消滅	3
4	円形	9	1.5 ～ 0.6		4
5	円形	8.5	1.5 ～ 0.5	墳頂に狐の巣穴	5
6	円形	14.5	2		6
7	円形	6	1.3	住宅団地造成で消滅	7
8	円形	18	2	1973年住宅団地造成に伴い発掘調査 周溝・粘土槨・鉄刀・土師器	8
9	円形	14	1.3 ～ 1.2	企業敷地造成崖で墳丘の1/5削られる	9
10	円形	17	2 ～ 1.7	墳端を企業敷地造成崖で削られる	10
11	円形	12.5	1.5 ～ 1		11
12	円形	13	2.2		12
13	円形	16	2 ～ 1.2		13
14	円形	10	1.4	1979年住宅団地造成に伴い発掘調査 土坑(木棺)・土師器	14
15	円形	4	0.5	1979年住宅団地造成に伴う発掘調査(下山南遺跡)で積石塚であることが判明	15
16	方形	11×9	3.2 ～ 1.9	1979年住宅団地造成に伴い発掘調査 横穴式石室・外護列石・須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・鉄釘・鉄滓	16
17	円形	14.3	不明 (墳丘削平)	1979年住宅団地造成に伴い発掘調査 周溝・埴輪・周溝内土坑(木棺)・須恵器・土師器	17
18	円形	?	?	国道183号線崖内で崩壊・消滅	18
19	円形	26	2.6	1968年工業用地造成に伴い発掘調査(1号墳) 周溝・葺石・木棺・粘土槨・銅鏡・玉類・鉄器・土師器	19
20	円形	12	1	1968年工場用地造成に伴い発掘調査(2号墳) 周溝・土師器	20
21	円形	4.5	1	1968年工場用地造成に伴い発掘調査(3号墳) 周溝・土師器	21
22	円形	11.5	1	1968年工場用地造成に伴い発掘調査(4号墳) 周溝・須恵器	22

※表内項目の「遺跡地図」は広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅺ(三次市・庄原市)』2006年

四拾貫太郎丸古墳群規模一覧

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
1	円形	12.5	1.5 ～ 1	畑地付近で所有者が芝を貼り保存	1
2	円形	30	4	土取りで墳丘の2/3掘削　※1959 ～ 60年発掘調査　葺石・二段築成？・竪穴式石槨・銅鏡・鉄器・玉類	2
3	円形	8	1.5 ～ 1.2	周溝・山道で西側を削られる	3？
4	円形	13	1.7 ～ 1	周溝	4？
5	円形	13	1 ～ 0.5	周溝・墳頂平坦面広し	5？
6	円形	9.5	1 ～ 0.5	周溝	6？
7	円形	5	0.3 ～ 0.2	周溝	7？
8	円形	9	0.7 ～ 0.5	墳頂盗掘痕	8？
9	円形	6	0.3 ～ 0.2	周溝	9？
10	円形	8	0.8 ～ 0.5		10？
11	円形	6	0.5 ～ 0.3		11？
12	円形	7.5	1 ～ 0.5	※「遺跡地図」の12号墳(径4.5m)は所在不明	
13	円形	5.5	0.3 ～ 0.2	周溝	14
14	円形	18	1.8 ～ 1.5	墳頂平坦面非常に広し	15
15	円形	8	0.8以上	山道で東側，崖で南側を2/3削られ墳丘不明瞭	16

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
16	円形	16	2.5 ～ 1.7	墳頂盗掘痕・養鶏場の山道で南側を1/3掘削　※「遺跡地図」では16号墳と17号墳を連ねて前方後円墳とする	17
17	円形	6.5	1 ～ 0.3		
18	円形	推定12	1以上	墳丘内を崖状に掘削されほぼ全壊状態・石棺の蓋石？が4枚程度残存	18
19	円形	15	1.8 ～ 1.5	周溝・墳頂盗掘坑・山道南側1/4掘削で長方形状にみえる	19
20	帆立貝形（全長33.5）	円28・方長6.5×幅6.0	円4 ～ 3.5 方1 ～ 0.5	葺石・二段築成・完存　※造出付円墳	20
21	円形	17.5	3.0 ～ 1.8	墳頂盗掘痕	21
22	円形	21.5	2.5 ～ 2	墳頂平坦面広し	22
23	円形	9	1.2 ～ 1		23
24	円形	11.5	1.5 ～ 1	周溝	24
25	円形	8	0.5	周溝・道路で西側と南側を削られ半壊	25
26	円形	11	1.8 ～ 1.5	周溝・山道で周溝の大半掘削	26
27	円形	7	1 ～ 0.5	周溝	27
28	円形	10	1.5 ～ 1	周溝・北側崖面で墳端崩落	28
29	円形	6	0.6	墳丘道路で掘削され北東端遺存・ほぼ消滅状態	29
30	円形	10	1.5 ～ 1	周溝・堀切状の山道で北側を，崖で西側を掘削	30
31	方形	12×10	1.2 ～ 1	周溝・墳頂面広く平坦	31
32	方形	25×24	4 ～ 3.5	二段築成・西側墳頂部は削平攪乱で墳丘土流出　※「遺跡地図」では32号墳と33号墳を連ねて前方後円墳とする	32
33	方形	8×8	1 ～ 0.5		
34	方形	一辺9	1 ～ 0.5	周溝・墳丘西側削平され長方形状にみえる	
35	方形	一辺10	1.5 ～ 1	周溝・墳丘西側を山道で削平受ける	33
36	方形	一辺14	1.7 ～ 1.5	周溝・西側若干削平・墳頂面広く平坦	34
37	方形	一辺8	1.5 ～ 0.5	周溝・墳丘土流れて墳形不明瞭・墳頂平坦	
38	円形	11	1.5 ～ 1	周溝	35
39	円形	13.5	2.5 ～ 2	周溝・墳頂付近多くの狐の巣穴で攪乱	36
40	円形	15	2.5 ～ 2	墳頂平坦面広し	37
41	円形	22	3 ～ 2.5	墳頂平坦面広し・墳斜面金網柵で仕切られる	38
42	円形	12.5	1.7 ～ 1.6	周溝・墳斜面に金網柵	39
43	円形	12.5	1.6 ～ 1.5	墳斜面に金網柵・団地造成崖で西側を1/2掘削	40
44	円形	13	1	団地造成で消滅	41
45	円形	16	1.7 ～ 1.5		42
46	円形	13	1.5		43
47	円形	8	1.2 ～ 1		44
48	円形	15.5	2 ～ 1.8		45
49	円形	14	1.5 ～ 1	周溝	46
50	円形	9.5	1 ～ 0.3	周溝	47
51	長方形	13×10.3	1 ～ 0.3	長円形状にもみえる	48
52	円形	8.5	0.5 ～ 0.3	山道で1/3削られる	49
53	円形	8	0.5	山道で1/3削られる	50
54	円形	17	1.8 ～ 1.6	周溝・山道で墳端の一部削られる	51
55	円形	9.5	1.7 ～ 0.5	墳頂上にトタン屋根倒壊	
56	円形	14.5	2 ～ 1.5	周溝	52

四拾貫日南古墳群規模一覧

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
1	円形	9	1.2 ～ 1	墳頂盗掘坑・山道で南側を削られる	1
2	円形	13.5	2 ～ 1.5	周溝・墳頂盗掘坑・墳頂平坦面小	2
3	円形	9	1.5 ～ 1.2		3
4	円形	7	1 ～ 0.6		4
5	円形	12	3 ～ 2	周溝・墳頂盗掘坑・墳頂平坦面小	5
6	円形	6.5	1 ～ 0.5	山道で南側墳端削られる	6

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
7	円形	6	1 ～ 0.5	墳丘西側1/3削られる	7
8	円形	6	0.5 ～ 0.3	周溝	8
9	円形	12	1.6 ～ 1.2	周溝	9
10	円形	18.5	2.5 ～ 2	列石状葺石露出・二段築成？	10
11	円形	7	1 ～ 0.5		11
12	円形	9.5	1.5 ～ 1	周溝	14
13	円形	9.5	1	墳丘の周囲を削られ墳形不明瞭	15
14	円形	6.5	1	南側墳端若干削平	16
15	円形	6	1.5 ～ 0.2	周溝	17
16	円形	12	1.6 ～ 1	周溝	18
17	円形	12.5	1.5 ～ 1	周溝	19
18	円形	9.5	1 ～ 0.3	周溝	20
19	円形	16.5	2 ～ 1.6	周溝	21
20	方形	8×8	1 ～ 0.5	墳頂面広く平坦　※「遺跡地図」では20号墳と21号墳を連ねて前方後円墳とする	22
21	方形	10×10	1.5 ～ 1		
22	方形	一辺20	2 ～ 1.6	周溝・南側崖面で墳丘の1/4掘削崩落	23

※「遺跡地図」の12号・13号墳は自然地形の小尾根先端と穴掘り土砂の高まりを古墳と誤認したもの。

四拾貫向山古墳群規模一覧

No.	形態	径	高さ	備考	遺跡地図
1	円形	13	2.5 ～ 1.8	北側墳丘内掘削で南側墳丘が円弧状に遺存	1
2	円形	7.5	1.5 ～ 1.2	墳丘東半分削平される	2
3	方形	19×16	3.5 ～ 3	南北方向に縦断する大盗掘坑あり	3
4	円形	？	？	消滅（位置不明）	4
5	円形	？	？	消滅（位置不明）	5
6	円形	？	？	消滅（位置不明）	6
7	円形	8	1 ～ 0.5	墳頂面広く平坦	7
8	円形	19	2.5	周溝・墳頂盗掘痕で若干凹む	8
9	円形	15	1.8 ～ 1.6	周溝・墳頂盗掘坑で削平され北側へ土崩流	9
10	円形	12	1.8 ～ 0.5	周溝	10
11	円形	10	1 ～ 0.6	周溝・道路で東側1/4削平・南も掘削受ける	11
12	円形	9	1 ～ 0.5	周溝・道路で東側1/4削平	14
13	円形	11	1.5 ～ 1	周溝・道路で東側墳裾削平される	15
14	円形	15	1.8 ～ 1.5	墳頂面広く平坦	16
15	円形	12	1.5	墳頂面広く平坦	17
16	円形	11	1.2 ～ 1	周溝・墳頂面広く平坦	18
17	方形	8×5	1.2 ～ 1	小型の長方形墳丘群が辺の軸をそろえるようにして狭範囲に集中。幅1m，深さ0.5mの周溝を伴う例もあり。墳丘土は古墳群とは異なり，軟質の黒褐色土で築成。方形墳丘群内から土師質土器皿（糸切底）などが表採されており，中世以降の墳墓群と考えられる。※桑田俊明「三次市四十貫町の六つの方形墳」『みよし地方史』第4号 三次地方史研究会1986年	19
18	円形？	4	1 ～ 0.5		20
19	方形	8×5.5	1.2 ～ 1		21
20	方形	9×8	1.2 ～ 1		22
21	方形	9.5×5	1.2 ～ 1		23
22	方形	9.5×8.5	1.2 ～ 0.5		24
23	方形	7.5×6.5	1.5 ～ 0.5		25
24	円形	10	1.5	尾根上造成削平で消滅	26
25	円形	10	1	尾根上造成削平で消滅	27
26	円形	6	0.3	尾根上造成削平で消滅	28

Ⅲ　調査の概要

四拾貫小原第16号古墳及び下山南遺跡は，三次市四拾貫町字下山１番地ほか８筆に所在する。

四拾貫小原第16号古墳は，横穴式石室を埋葬施設とする南北約11ｍ，東西約９ｍの規模の方形の墳丘を呈する古墳で，墳丘の東斜面と西斜面に葺石状の石列が存在し，石室の開口部両側に外護列石が設けられている。横穴式石室は無袖式の石室であり，長さ約８ｍの規模である。奥壁・基底石・天井石は大形の石材，石室の上半部はやや小形の石材を用いて構築されている。また，閉塞石が一部遺存しており，この石の内側までを玄室とすると，天井石の一部は後世に抜き取られたと考えられる。玄室の長さは約5.3ｍ，羨道部の長さは約2.6ｍである。石室内からは，須恵器(杯蓋・杯身・高杯・平瓶・はそう・台付長頸壺・堤瓶・蓋)，土師器(皿・杯)，鉄器(鉄鏃・馬具・鉄釘)が出土した。

下山南遺跡は，住宅団地造成工事範囲の最高位，標高185ｍ付近に位置する積石塚と土坑である。積石塚は，礫（川原石）を円形に積み上げたもので，径約４ｍ，高さ0.5ｍの規模である。積石の下では，埋葬施設と考えられる小形の土坑を確認したが，遺物は出土しなかった。また，落とし穴と考えられる土坑(ＳＫ１・２)を２基確認した。

Ⅳ　遺構と遺物

１　四拾貫小原第16号古墳

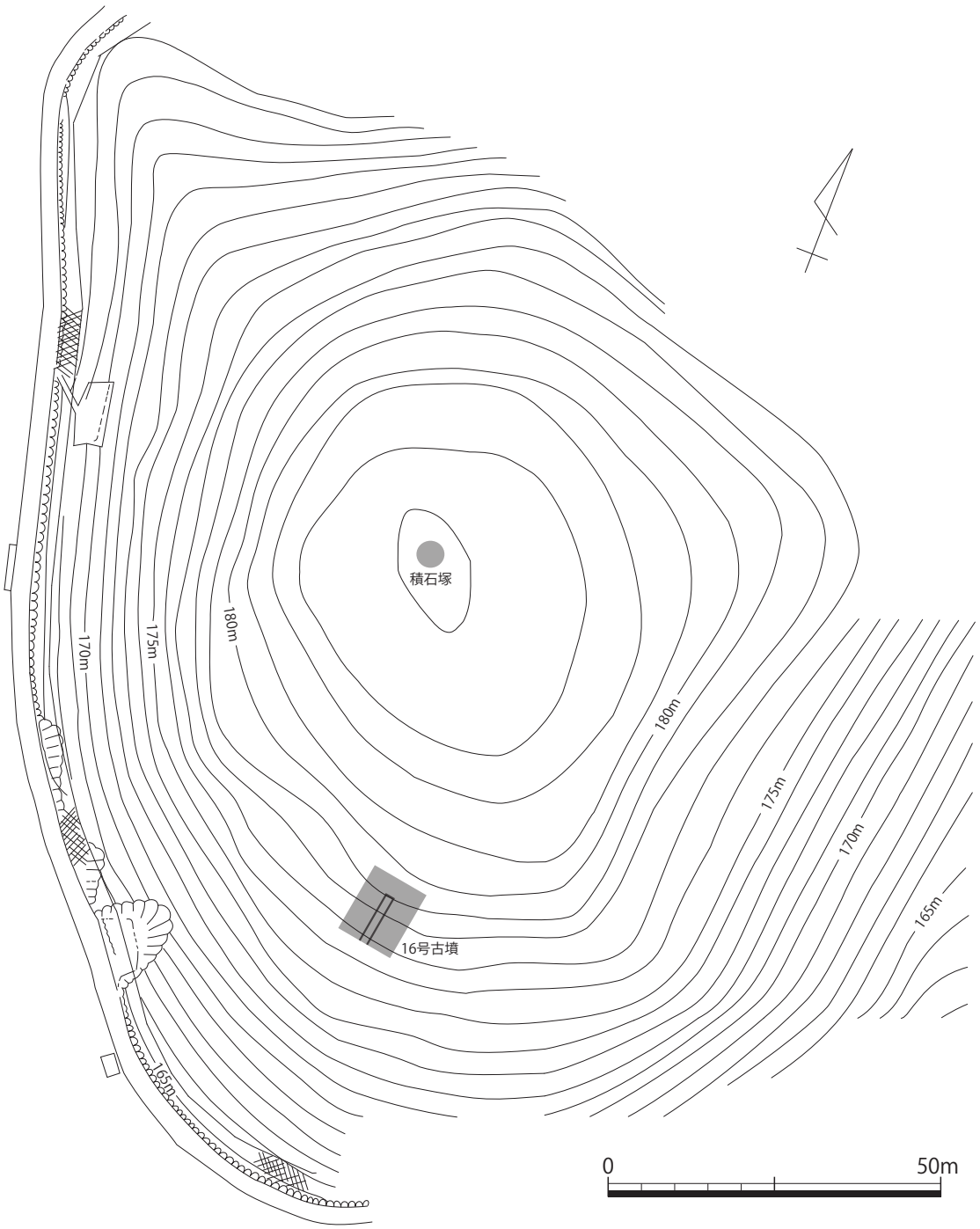
(１)立地と調査前の状況

四拾貫小原第16号古墳は，三次市四拾貫町にある四拾貫生協団地から南西に延びる尾根の馬洗川と四拾貫川とに接する丘陵上に位置し，丘陵頂上部（標高約185ｍ）からやや南東に延びる丘陵緩斜面の標高178ｍ付近に所在する。調査時，既に造成工事が行われ古墳の周囲は掘削されて崖状をなし，また，墳丘周囲の一部では重機による削平が見られるなど，原状の地形が損なわれている部分が多かった。そうした中で調査前の観察では，古墳は盗掘や削平などを受けた痕跡は認められず，墳丘の周囲には浅い溝状の落ち込みが廻り，周溝が推定された。また，地形測量をする中で方墳の可能性が想定された。

(２)墳丘

発掘調査は造成工事と併行して実施するなど，困難な条件で行わざるを得なかったこともあり，墳丘の確認を十分行うことができたとはいえないが，南北約11ｍ，東西約９ｍの規模で，高さは南側の羨道部床面から3.2ｍ，北側の奥壁石床面から2.9ｍ，東側の周溝から2.2ｍ，西側の周溝から1.9ｍであり，地形測量，外護列石・葺石状の石列の状況から方墳と考えられる。

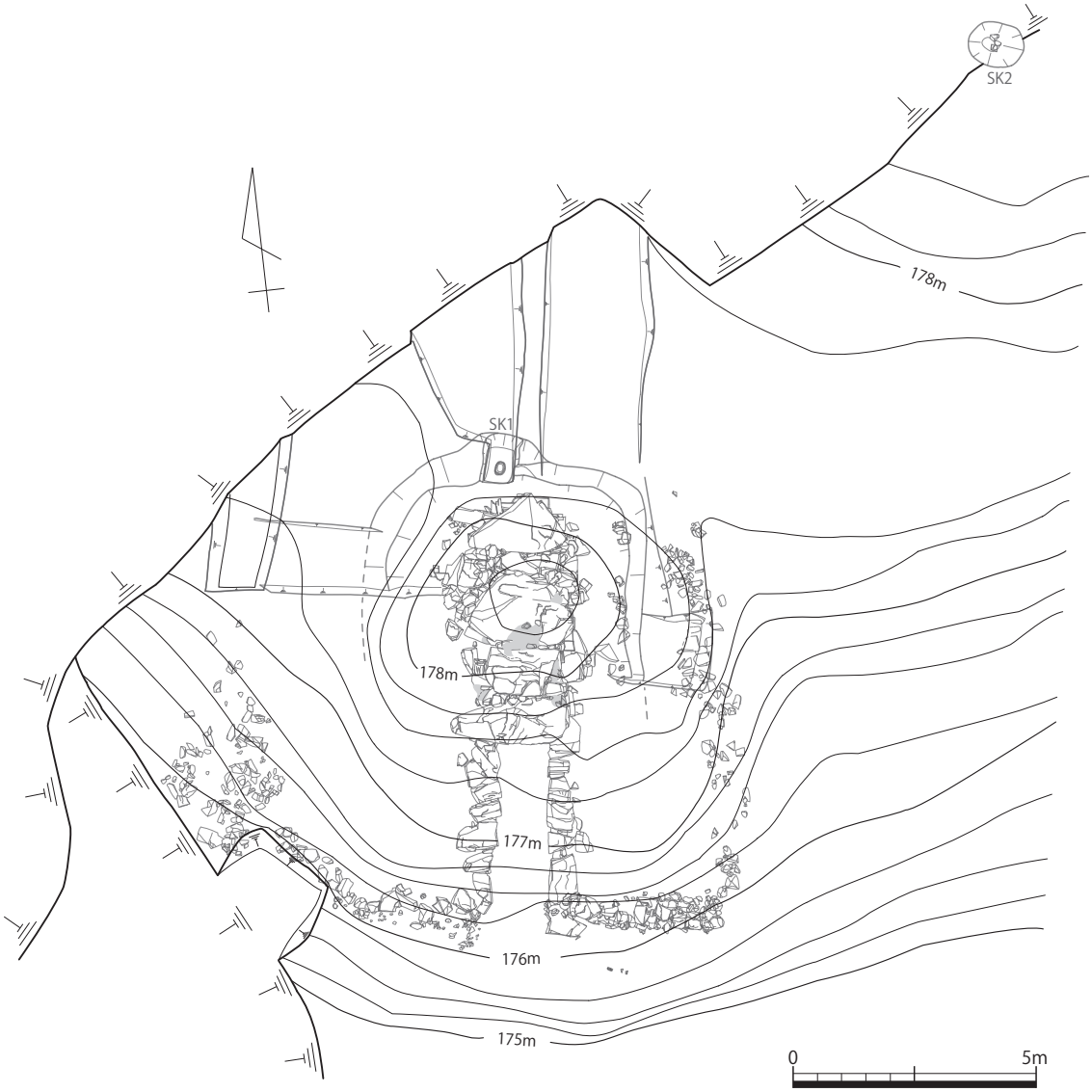
墳丘の盛土は，上から順に，茶褐色土を主体とするもの，黒褐色土を主体とするもの，明黄褐



第３図　周辺地形図(1：1,000)

色土を主体とするものの３種類に大別できる。墳丘の盛土と石室の構築は大きく３段階に分けられる。第１段階は石室掘方に奥壁の１段目の大型石と側壁の基底石及び部分的に石材を構築した後，掘方の肩部(上端)まで明黄褐色土，黒褐色土を互層に石室裏側に裏込めを行い，第２段階は奥壁・側壁の２～３段目以上に石を構築した後に，石室の周囲に黒褐色土を主に互層に盛土を行い，第３段階は天井石を置いた後に石室を中心に茶褐色土，黒褐色土を互層に盛土し，墳丘を構築したと考えられる。周溝は南側を除いてコ字状を呈し，北側(古墳の高所側)に向かうにしたがって深さが増しているようであるが，北側部分は重機による削平・排土作業により原地形が損なわれていたため不明瞭な部分が多い。

墳丘には，東・西に葺石状の石列が存在する。墳丘東側では，葺石状の石列が上下二段に存在する。上段は，墳頂から東に約２ｍ下方の墳丘斜面に角礫が南北に長さ約3.5ｍほど一列に存在する。下段は，上段と１ｍ前後の間隔をもち，大小の角礫が長さ約7.5ｍ，幅１ｍ前後で存在する。



第４図　四拾貫小原第16号古墳墳丘測量図(1：150)

北半分は比較的密に角礫がみられるが，南半分は散在的で東側外護列石の東端に接している。墳丘西側では，墳頂から南西約５～６ｍ下方の墳丘斜面に大小の角礫が長さ約4.6ｍ，最大幅約2.6ｍの範囲でみられるが，全体に想定される墳丘外に存在すること等から原状を遺していない可能性がある。

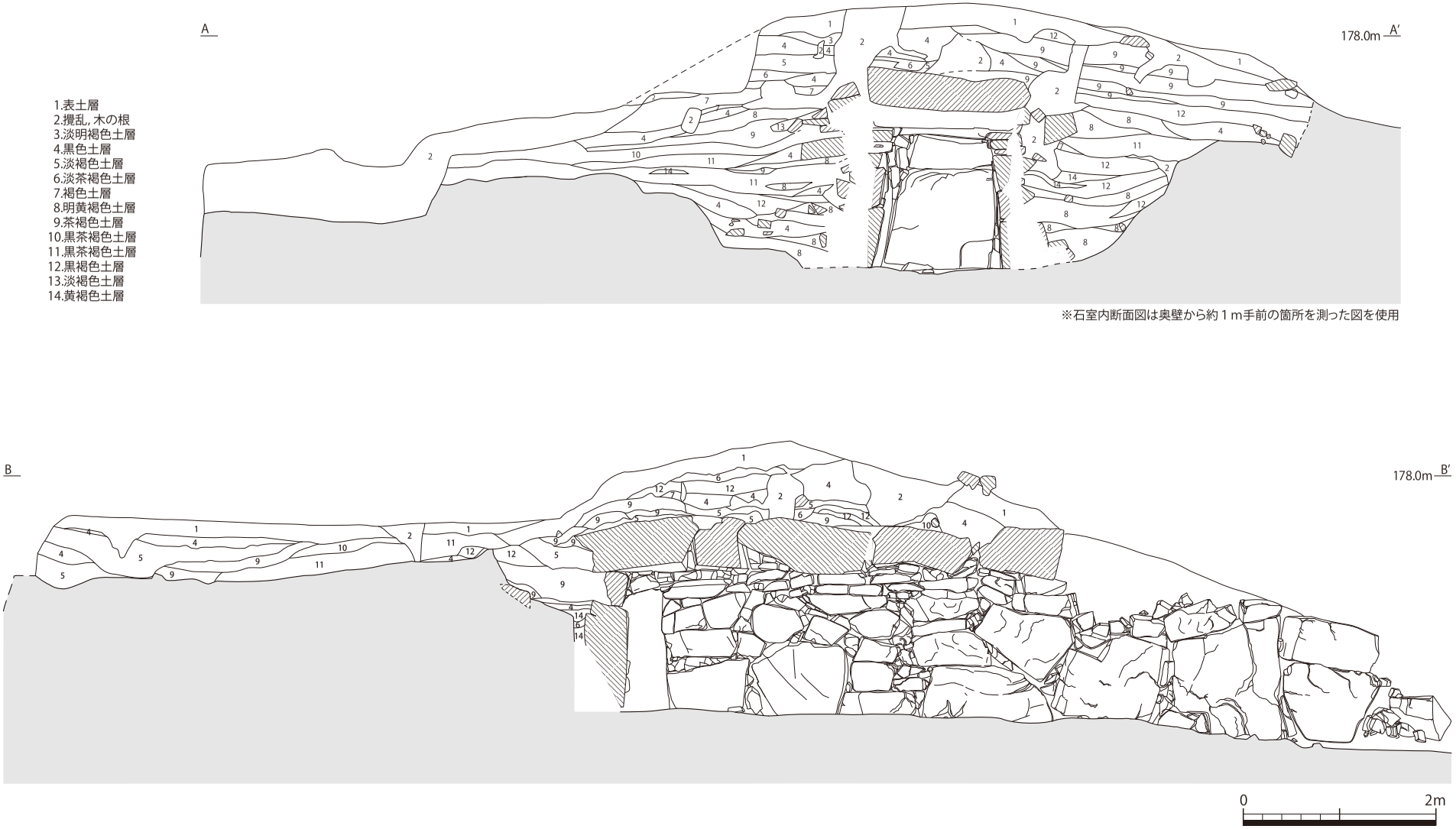
横穴式石室の入口両側には，墳丘裾に沿って外護列石が西側壁及び東側壁の各南端の石積みにほぼ直結して構築されている。西外護列石は，長さ約３ｍ，高さ40～80㎝で下段は外護列石が粗である。東外護列石は，長さ約３ｍ，高さ40～90㎝で西外護列石に比べて密に構築されている。

（３）横穴式石室

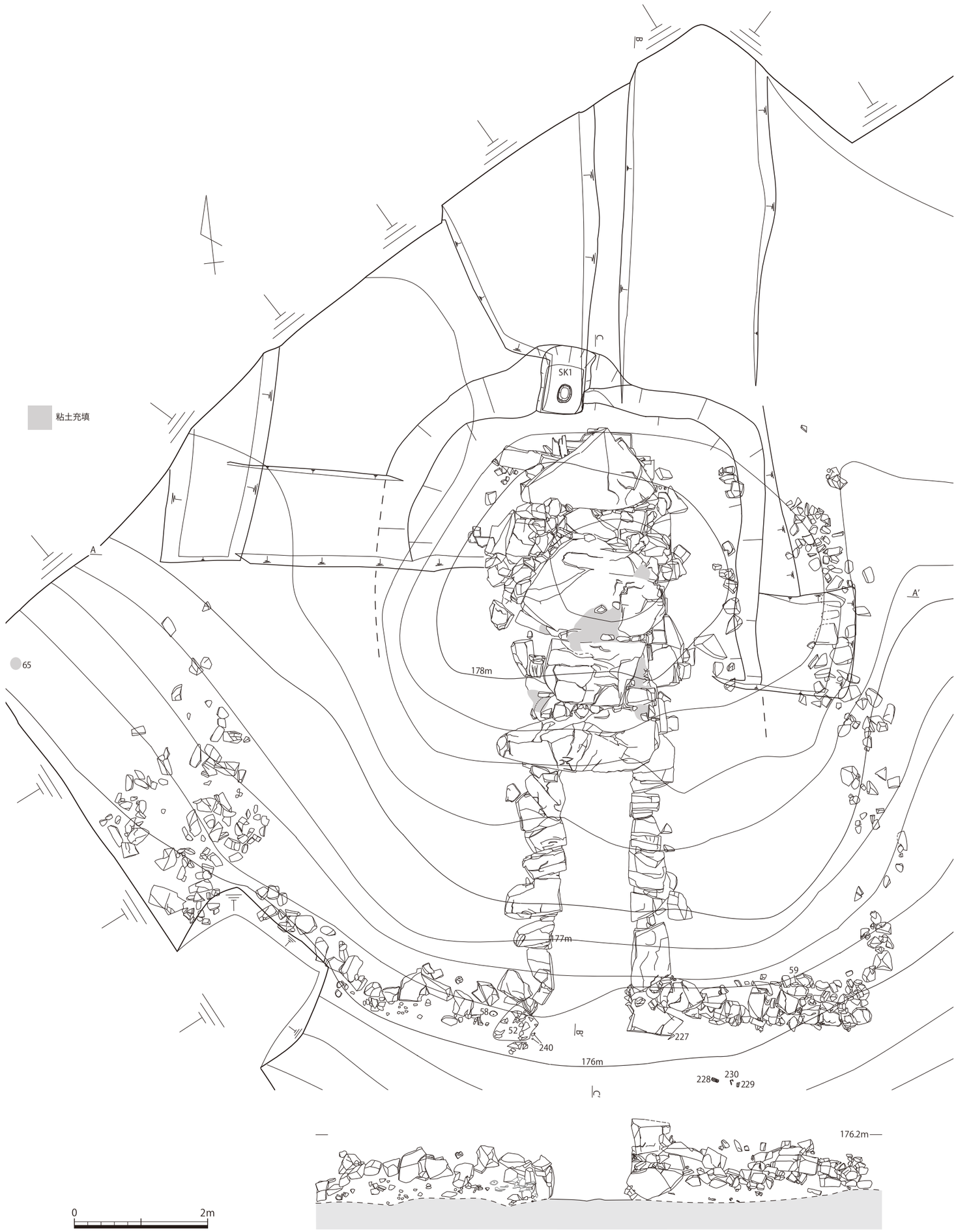
横穴式石室は南方向に開口し，長軸はＮ５°Ｗを指している。石室は，墳丘中央に設けられた平面コ字状の掘方に構築されている。石室掘方の規模は，長さ約10ｍ，幅約5.7ｍ，深さ1.5ｍである。石室には，一部天井石等が失われている可能性があるが，大形の石材が５枚遺されていた。石室の規模は，長さが西側壁で7.9ｍ，東側壁で8.1ｍ，幅（床面）が奥壁で1.22ｍ，天井石南端付近で1.3ｍ，羨道部端で1.19ｍ，高さは奥壁で1.52ｍ，天井石南端で1.54ｍ，羨道西側壁で0.78～1.60ｍ，羨道東側壁で7.6～1.58ｍである。石室の幅（床面）は，中程で僅かに拡がるものの1.19～1.3ｍとほぼ差がなく，長方形を呈している。床面は奥壁から羨道部南端にかけて約0.3ｍ下がっている。また，石室の玄室と羨道の境界は，閉塞石が奥壁から南に5.3ｍ付近にあることから，天井石はこの辺りまであったと思われ，後世に天井石が取り去られた可能性がある。閉塞石があるところが玄室の端とすれば，西側壁の基底石が奥壁から６枚目，東側壁の奥壁から基底石６枚目の南端，奥壁から5.5ｍ地点が玄室と羨道部との境界であると考えられる。従って玄室の長さは，（西側壁）5.2ｍ，同（東側壁）5.5ｍとなり，羨道部の長さは，（西側壁）2.7ｍ，同（東側壁）2.6ｍとなる。

○羨道

前述したように，羨道部の長さは，（西側壁）2.7ｍ，（東側壁）2.6ｍである。西側壁は，３個の基底石が入口側から奥壁に向けて存在する。入口側から，長辺60㎝，短辺50㎝の石材を広口積み，その北側に，長辺128㎝，短辺90㎝の石材を広口積み，その北に，短辺40㎝，長辺52㎝の石材を縦長の広口積みにし，その下に15㎝～20㎝の小角礫を詰めて基底石を安定させている。その北に，短辺45㎝，長辺62㎝の石材を縦長の広口積みにしている。それら３つの基底石の上には，長辺40～75㎝の石材を15個横長の小口積みにし，石室の高さと安定を図っている。東側壁は，入口側から奥壁に向けて２個の基底石が存在する。入口側から，短辺50㎝，長辺80㎝の石材を縦長の広口積みに，その北に，短辺72㎝，長辺126㎝の石材を縦長の広口積みにして，２個目と３個目の基底石の隙間を長辺20㎝前後の小角礫を詰めて基底石を安定させている。これら２つの基底石の上には，長辺20㎝～75㎝の石材を横長の小口積みにして，羨道壁の安定を図っている。



第５図　四拾貫小原第16号古墳墳丘断面図(1：60)



第６図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室平面図(1：60)

○玄室

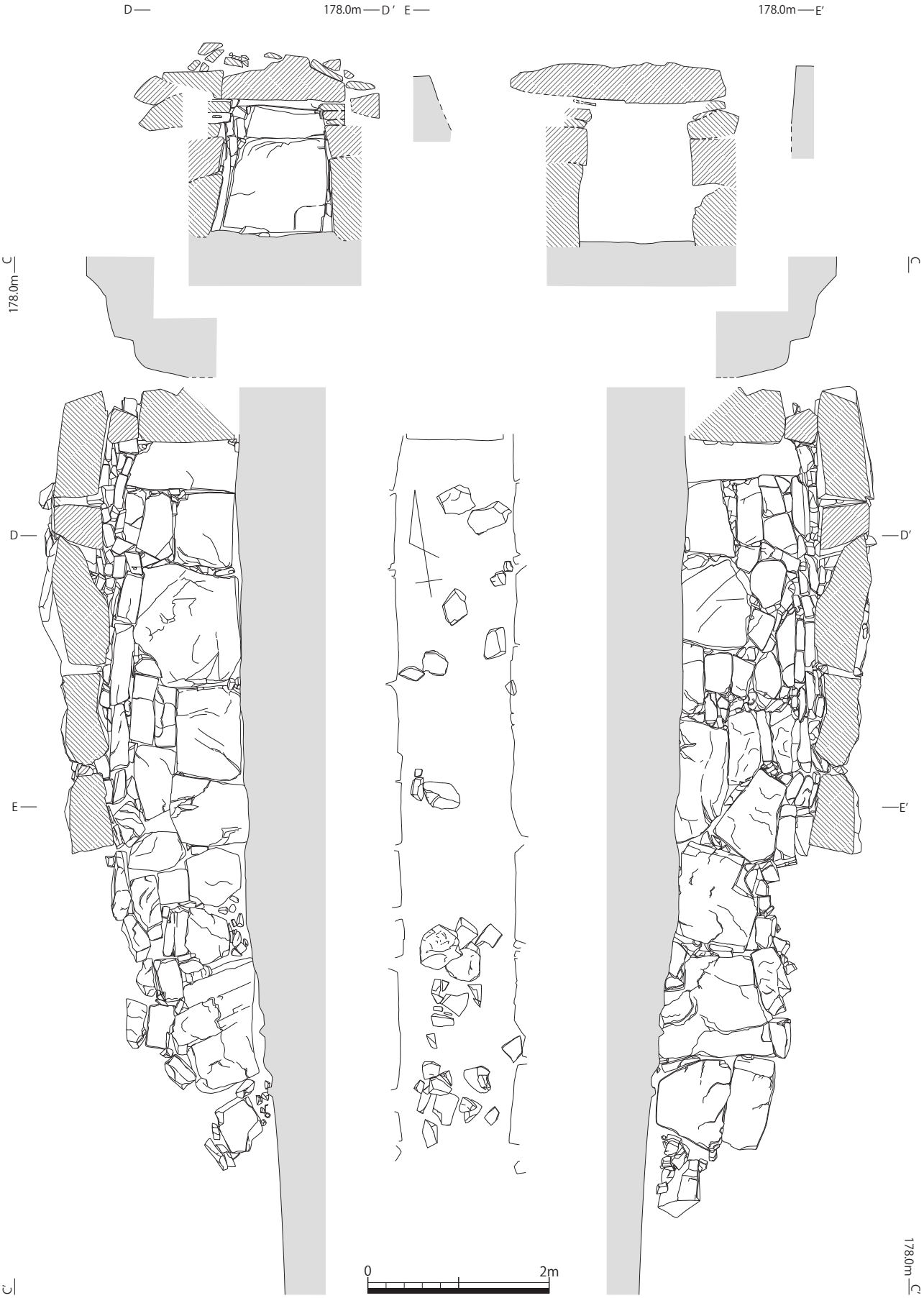
奥壁から，西側壁・東側壁共に，南側天井石を支えている壁の石までが玄室と考えられる。玄室の長さは西側壁5.2ｍ，東側壁5.5ｍである。この玄室の平面形は，幅1.24 ～ 1.28ｍのほぼ長方形である。

〔奥壁〕 下段に長辺125㎝，短辺110㎝，奥行約70㎝の石材を広口積みにして基底石とし，その上に，長辺90㎝，短辺38㎝，奥行30㎝の石材を横長に広口積みにして載せている。奥壁西側壁との隙間には，長辺10㎝～ 20㎝の小角礫で埋めて安定と補強を図っている。

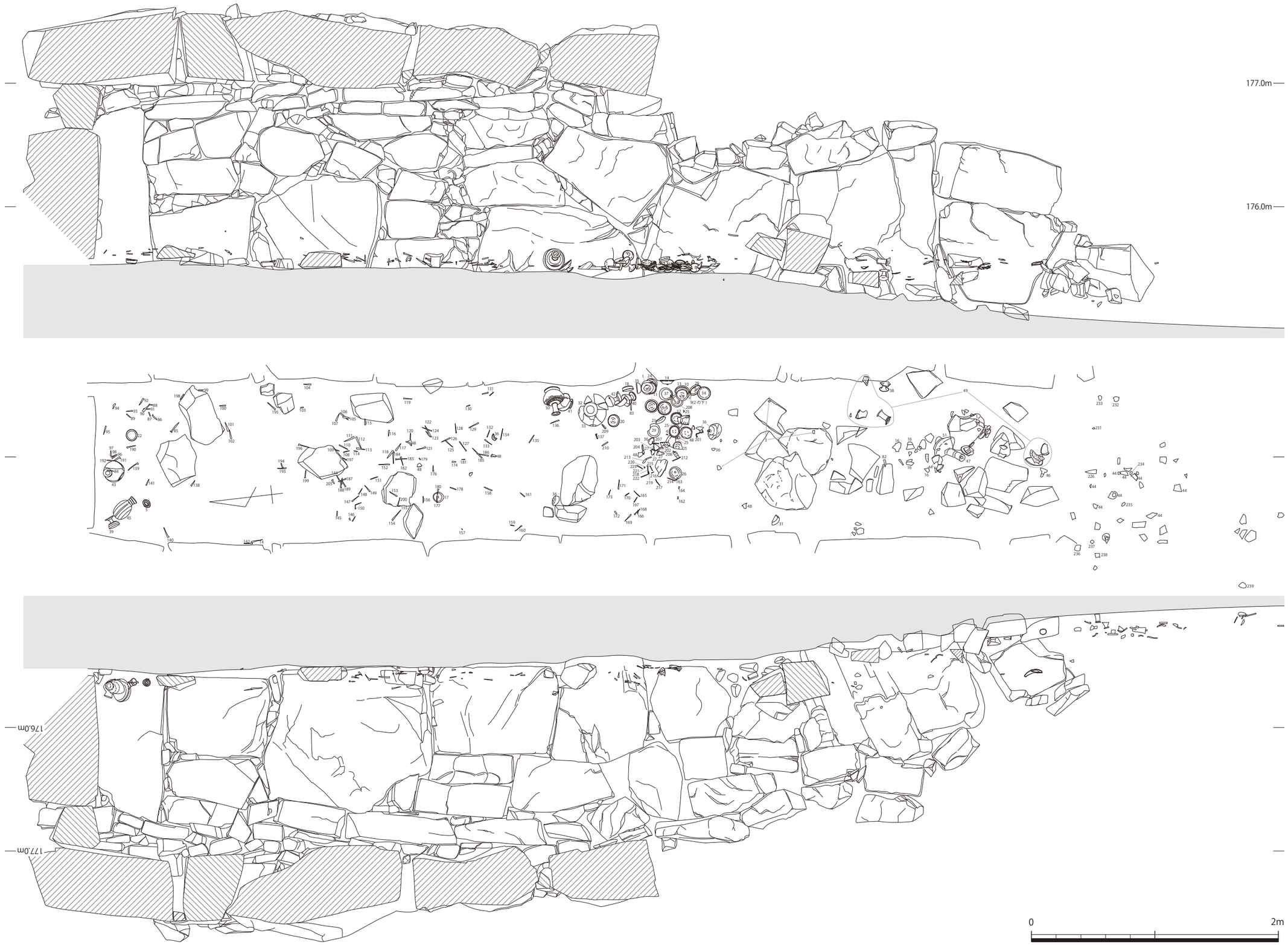
〔西側壁〕 ６個の石材を置いて基底石とし，これら基底石の上部に２～５段ほどの角礫を整然と積んでいる。その積み方は，角礫の長辺10 ～ 95㎝，短辺10 ～ 40㎝の小口面を横長にして積む小口積みであるが，縦長にした小口積みもみられる。奥壁から２・４枚目の基底石は，横長の広口積み，１枚目と３・５・６枚目は，縦長の広口積みである。奥側から１枚目の基底石は，長辺120㎝，短辺58㎝の石材を縦長の広口積み，同２枚目の基底石は，長辺94㎝，短辺62㎝の石材を横長の広口積み，同３枚目の基底石は，長辺120㎝，短辺110㎝の石材を縦長の広口積み，同４枚目は，長辺102㎝，短辺70㎝の石材を横長の広口積み，同５枚目は，長辺90㎝，短辺65㎝の石材を縦長の広口積みに立てており，奥壁から６枚目は，短辺45㎝，長辺62㎝の石材を，縦長の広口積みしている。奥壁から２枚目と３枚目の間に，長辺20㎝前後の角礫３個を，３枚目と４枚目の間には10㎝前後の角礫２枚で基底石の安定を図っている。

〔東側壁〕 西側と同じく６個の石材を基底石として置いている。基底石の上部には，３～７段の角礫を比較的整然と積んでいる。その積み方は，長辺が10 ～ 100㎝，短辺が10 ～ 70㎝の多くは横長にして積む小口積みであるが，斜めに積んだ小口積みも存在する。奥壁から１枚目の基底石は，長辺130㎝，短辺45㎝の石材を縦長の広口積み、同２枚目は，長辺70㎝，短辺52㎝の石材を横長の広口積み，同３枚目は，長辺80㎝，短辺75㎝石材を横長の広口積み，同４枚目は，長辺85㎝，短辺24㎝の横長の広口積み，同５枚目は，長辺136ｃｍ，短辺54㎝の石材を横長に広口積み，奥壁から６枚目は，長辺95㎝，短辺82㎝の広口積みにしたものである。基底石２枚目と３枚目の間には，長辺10 ～ 28㎝の角礫３枚で隙間を埋め，基底石を補強している。

〔天井石〕 奥壁の上部から，南側にかけて大きい天井石が現状で，５個配置されているが，閉塞石の位置から，南側に１～２枚の天井石があったものと推測される。現状で残っている天井石で，奥壁上部の大きい天井石は，東西202㎝，南北114㎝，厚さ48㎝の平面形三角形の板石，奥壁から２枚目の天井石は５つの天井石としては一番小さく，東西126㎝，南北54㎝，厚さ50㎝の三角形に近い長方形の板石，同３枚目の天井石は，５枚の天井石のなかでは一番大きく，東西226㎝，南北152㎝，厚さ40㎝の平面不整台形の板石，同４枚目の天井石は，５枚の中では２番目に小さく，東西160㎝，南北96㎝，厚さ40㎝の平面長方形の板石，一番南にある５番目の天井石は，東西244㎝，南北102㎝，厚さ46㎝の西に張り出して設置された平面やや三角形をした板石である。奥壁から２枚目の天井石の東西の側壁との隙間を埋めるために，長辺15 ～ 70㎝，短辺10 ～ 60㎝の数十個の角礫で覆われ，玄室内に土砂が入らないよう保護している。



第７図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室実測図(1：60)



第８図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室遺物出土状況図（１）（1：30）

奥壁から４枚目の天井石の南北と東西にも，天井石間の隙間や側壁との隙間を埋めるため，長辺15 ～ 50㎝，短辺10 ～ 40㎝の多くの角礫で覆って塞いでおり，玄室の保護をしている。
床面　床面は，淡黄褐色～茶褐色の土層で構成されている。また，玄室の奥側の東側壁にそって４個の角礫，玄室の中ほどの西側壁にそって４個の角礫が存在し，これらは棺台石と考えられる。床面は，奥壁から羨道部南端に向かって，約30㎝下がっているが，地山面を利用したしっかりした床面である。
〔閉塞石〕　奥壁から南の5.3ｍ付近から南側に長辺30 ～ 55㎝，短辺25 ～ 45㎝の閉塞石とみられる角礫が存在する。
〔遺物の出土状況〕　奥壁から0.5ｍまでの範囲で須恵器の提瓶・蓋・高杯・平瓶・杯身が出土している。奥壁から0.5 ～ 3.5ｍまでの範囲には須恵器の破片数片のみであり，棺台石の辺りを中心に鉄釘が多く出土している。奥壁から3.5 ～ 5ｍの東側壁側の範囲から多くの須恵器（杯蓋・杯身・高杯・平瓶・はそう・台付長頸壺）や土師器（皿・杯）がまとまって出土している。玄室南端から羨道部にかけて，角礫の間から須恵器（高杯・台付長頸壺・平瓶・子持須恵器の一部）が出土しているが，ほとんどが割れた状態であった。また，石室入口の前庭部からは須恵器の破片や鉄滓が出土している。

（４）出土遺物

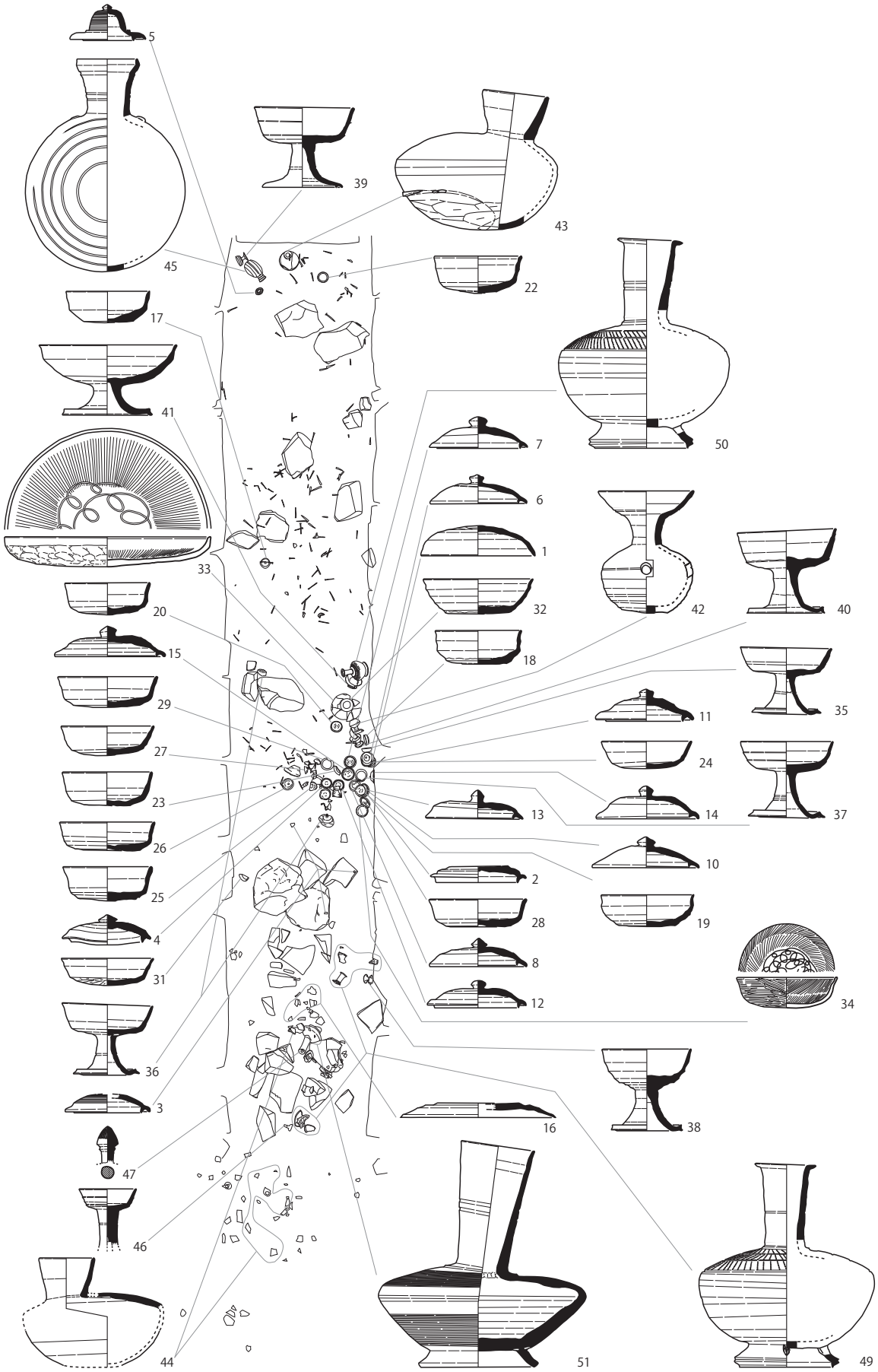
四拾貫小原第16号古墳から出土した遺物は，須恵器（杯蓋，杯身，高杯，はそう，平瓶，提瓶，子持須恵器のものとみられる高杯部，つまみ又は装飾部とみられる須恵器，台付長頸壺，甕等），暗文土師器（皿・杯），鉄器（鉄鏃・馬具・釘），鉄滓が出土した。

須恵器は多く出土しており，その一部の特徴を記す。杯蓋と杯身がもっとも多く，杯蓋はつまみをもち，かえりがある口径10㎝前後と11㎝前後の小形のものが多く，杯身も口径９㎝前後と10㎝前後の小形のものが多いが，つまみとかえりをもたない杯蓋や受部に立ち上がりをもつ杯身も数点ある。杯蓋と杯身のうち２と22，６と24，７と23，11と18，14と28，15と32はセットとなる可能性が高いものである。高杯も比較的多く，杯部が底部から口縁部に鋭角的に立ち上がるもの，若干緩やかに立ち上がりやや深いもの，椀状をなして脚部が低いものがある。台付長頸壺は４点出土しており，口縁端部が断面逆Ｌ字状を呈し体部の最大径が上半部にあるものの丸みを呈する特徴的な形態のもの，単純な口縁を呈し体部の最大径の部分が大きく張るもの，体部は略球形を呈し頸部に凸帯をもつものがある。

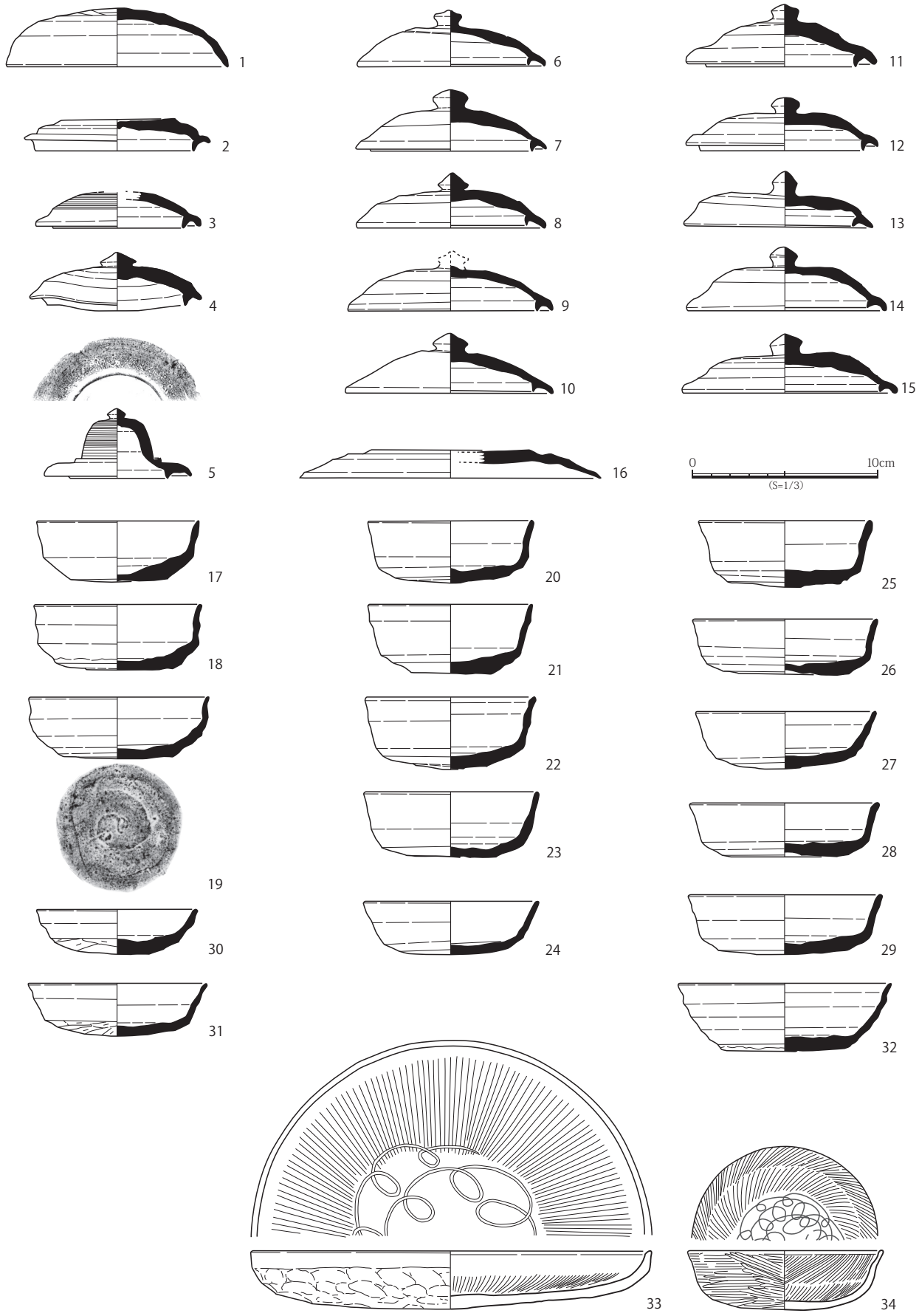
暗文土師器は，螺旋暗文と放射暗文が施された皿Ａと螺旋暗文と放射暗文（二段）が施された杯Ｃがあり，ともに赤褐色を呈する丁寧な作りである。

須恵器とともに多く出土したのは，鉄器である。鉄器の中で，鉄釘が一番多く，144個が出土した。この鉄釘を分類すると，次の表となる。

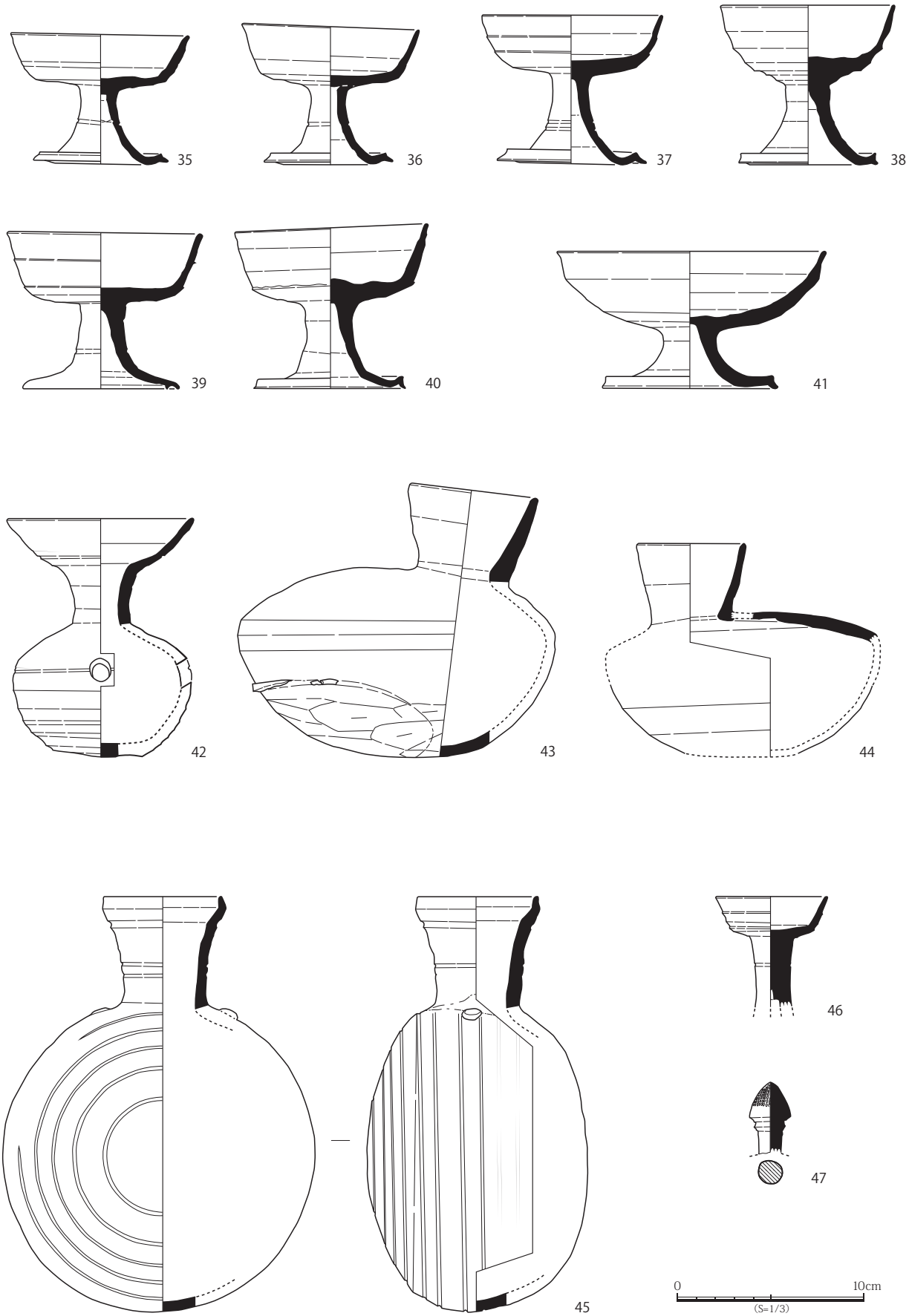
分　類		個　数
完形のもの	折頭形であるもの	44
	折頭形でないもの	22
頭部があり先端が欠失しているもの	折頭形であるもの	26
	折頭形でないもの	11
頭部を欠失しているもの		28
頭部と先端部を欠失しているもの		13
計		144



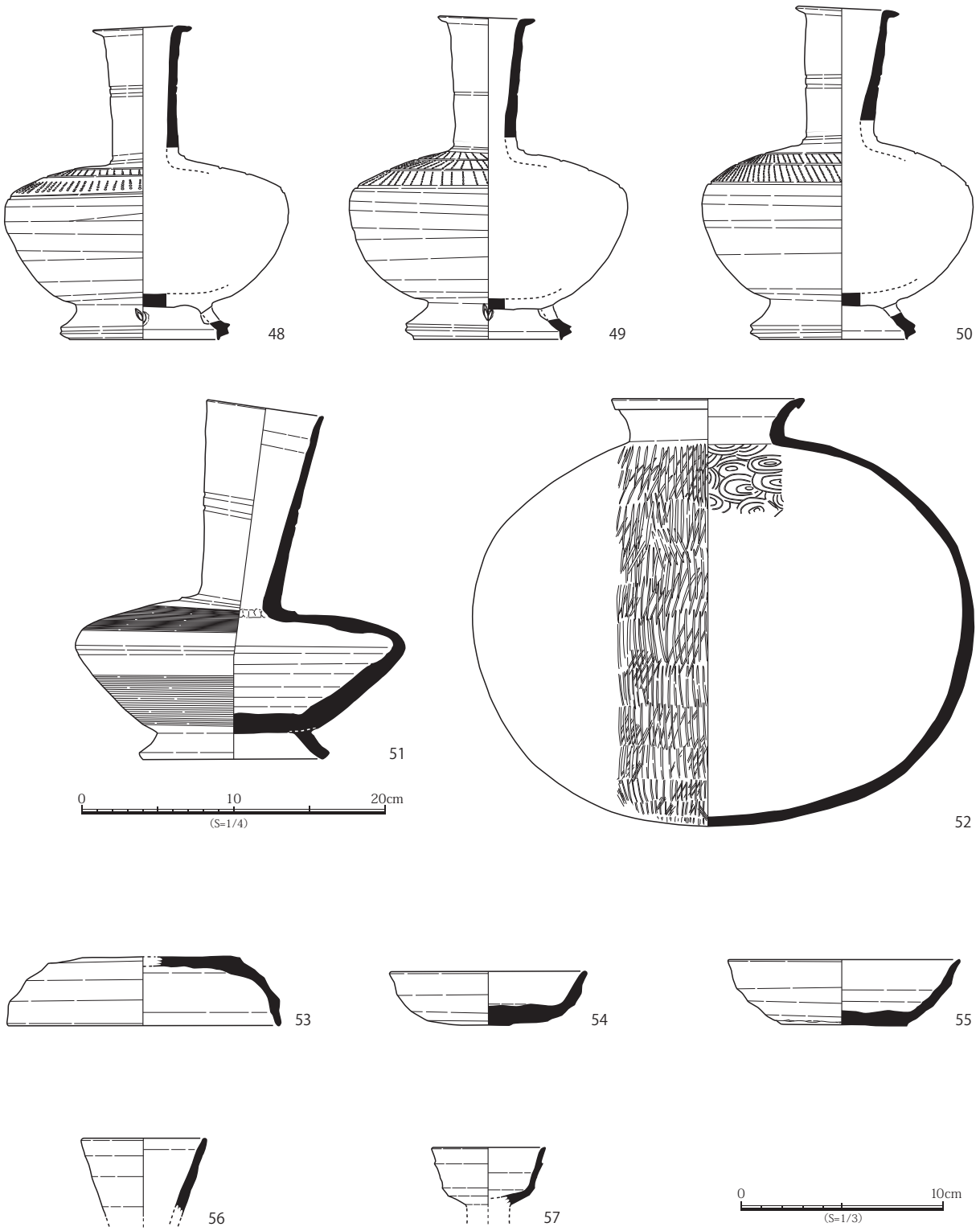
第９図　四拾貫小原第16号古墳横穴式石室遺物出土状況図（２）（1：50　遺物1：6）



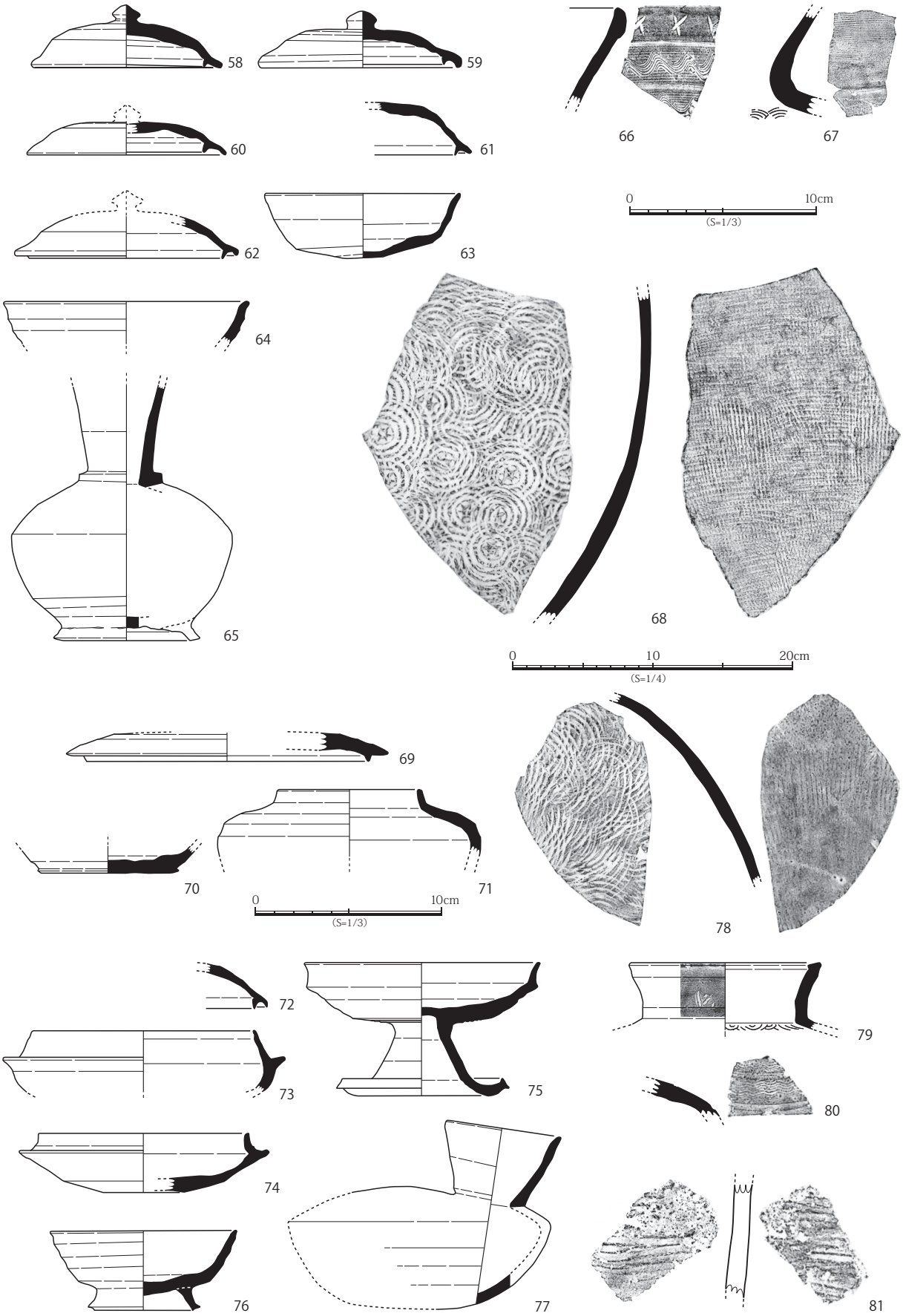
第10図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（1）（1：3）



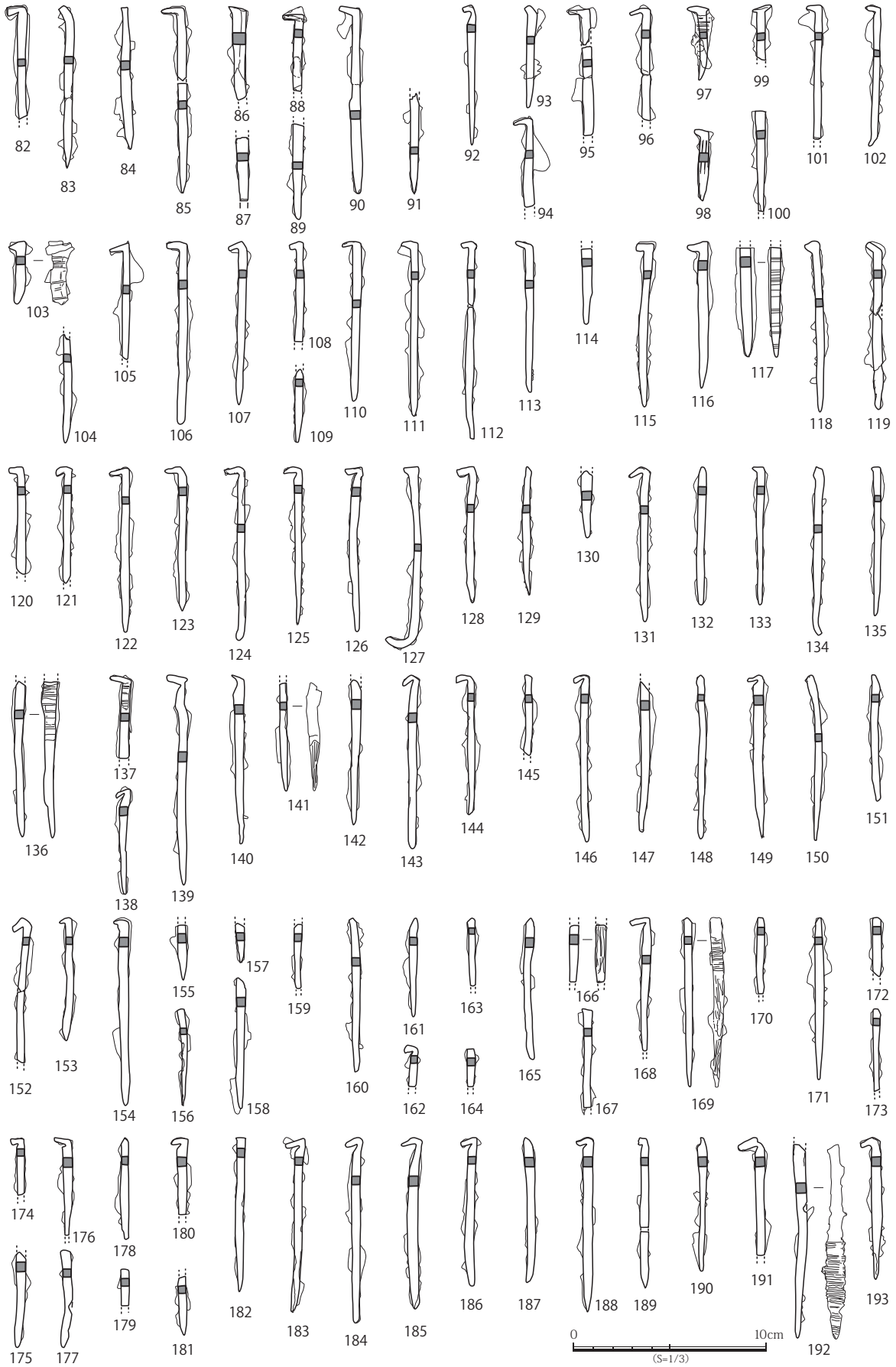
第11図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図（２）（1：3）



第12図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図(3)(48～52は1：4　他1：3)



第13図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図(4)(1：3　65・68・78は1：4)



第14図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図(5)(1：3)

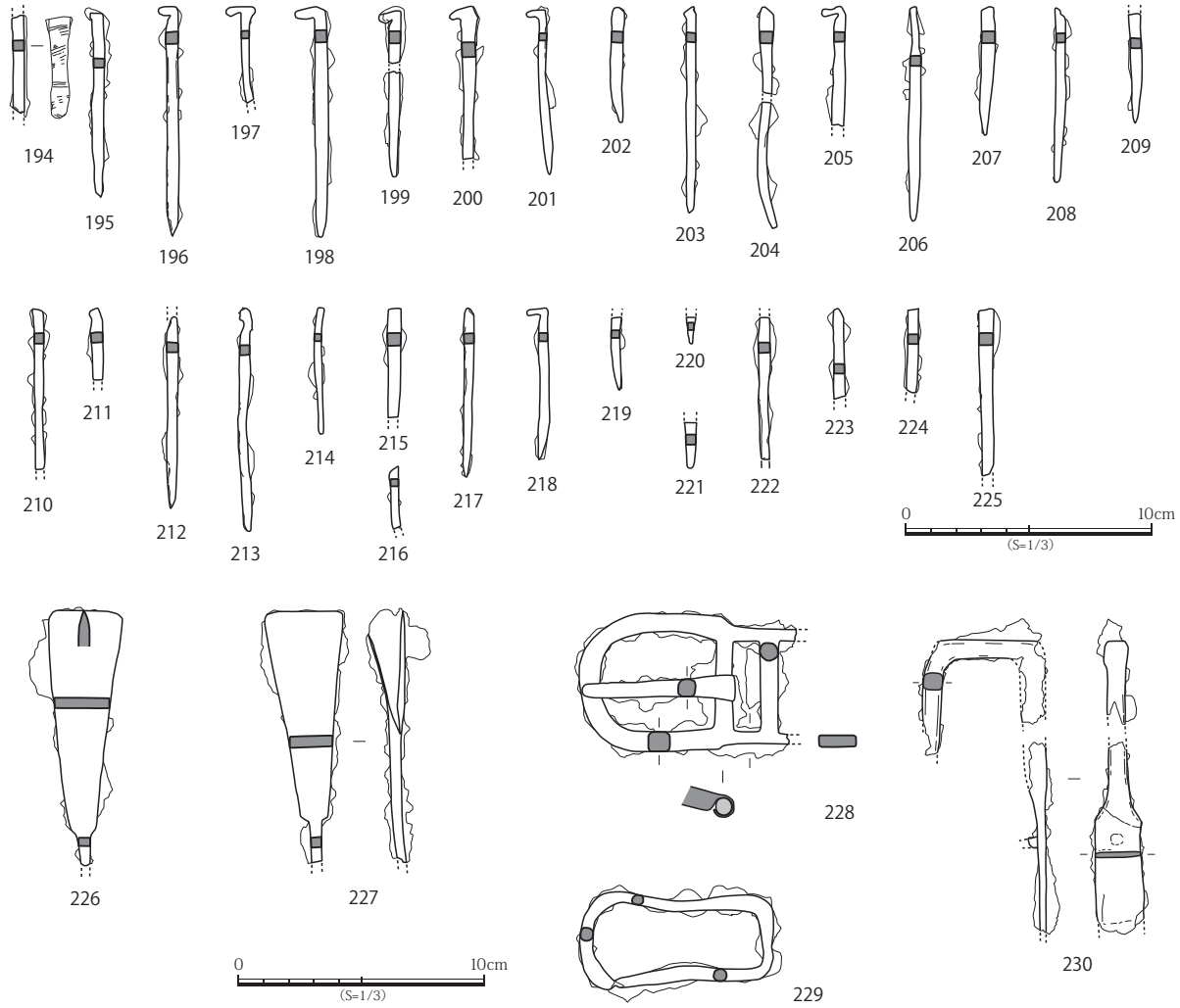
この結果，完形のものと頭部のあるものの合計は，103本で，使われた釘はこの数となる。

また，完形の釘で，折頭形の釘の長さの平均は，8.4㎝で，折頭形でない釘の長さの平均は8.0㎝となった。鉄釘の中で，木目があるものについて考察すると，釘の頭部に横目があるもの４本，頭部に縦目のあるもの１本，釘の先端部にかけて横目のあるもの２本，先端部にかけて縦目のあるもの１本で，木棺の造り方も，横の板と縦の板，底板の用い方がいろいろあると考えられる。また，完形の釘で，横目と縦目のあるNo.169は，頭の方の横目が，上から2.8㎝，その下に先端部まで縦目があり，その結果釘を打ちつける最初の板の厚さが2.8㎝であったものと考えられる。また，No.136は，頭部の方から，3.0㎝のところまで，横目があり，板の厚さが3.0cmであったと思われる。木材加工の技術も，薄く板を加工していたと思われる。

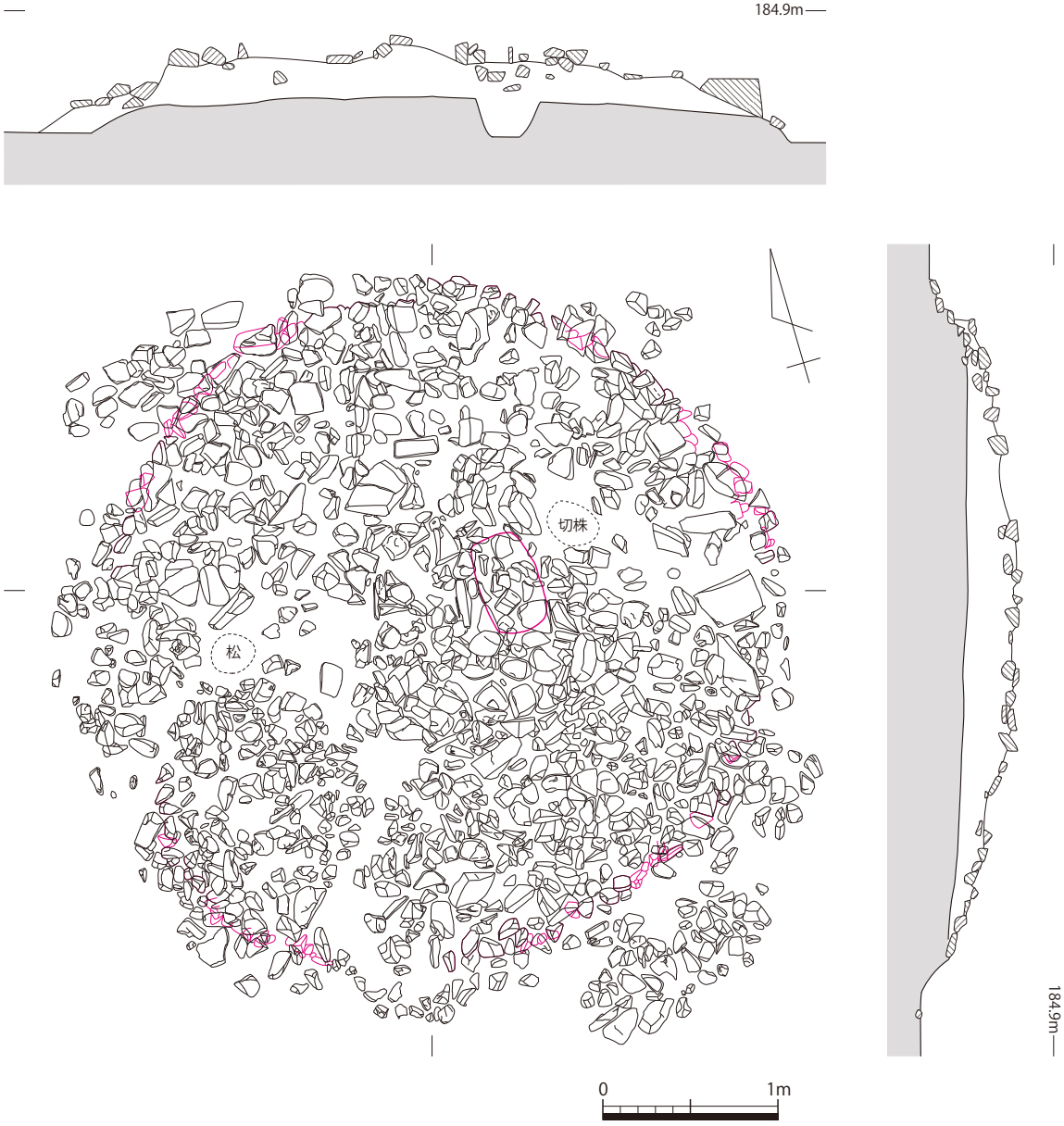
その他に鉄器としては鉄鏃と馬具がある。鉄鏃は２点あり，共に方頭鏃Ｂ－Ⅱ形式（鑿頭式）※である。馬具は，絞具や輪金と三角錐形壺鐙のＵ字形金具と考えられるものがある。

また，鉄滓は小形の塊である。

※杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８　1988年



第15図　四拾貫小原第16号古墳出土遺物実測図(6)（1：3）



第16図　積石塚墳丘実測図（1：40）

２　下山南遺跡

（１）積石塚

積石塚は，丘陵頂部の標高約185ｍ（住宅団地造成工事範囲の最高位）付近に位置する。

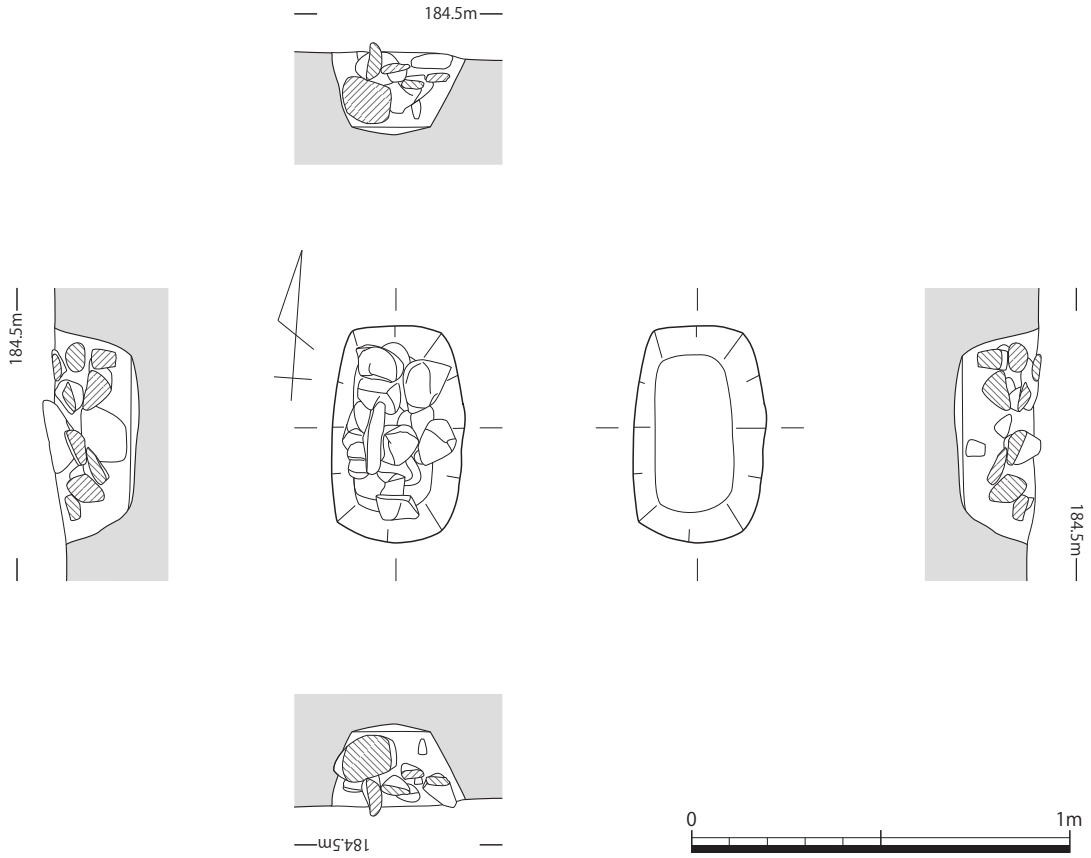
積石塚は，円形を呈し，東西約4.0ｍ，南北約3.9ｍ，高さ約0.5ｍの規模である。基盤の黒色土を円形に整形し，その上に暗褐色土を盛り土し，表面に大小の礫を敷き詰めて構築したものである。礫は若干角礫を含むが，ほとんどは川原石である。

積石の下の中央やや南西寄りで下層の黒色土上面から掘り込まれた土坑を検出した。土坑は平面隅丸長方形を呈し，長辺は南北（Ｎ４°Ｅ）で長さ114㎝，短辺は東西で幅70㎝，床面（底面）は，南北82㎝，東西42㎝，深さは40～46㎝で，土坑内に小形の礫が13個落ち込んだ状態で入っており，底面から浮いた状態であった。遺物は出土しなかった。小形の土坑で埋葬施設と考えられる。

（２）土坑

土坑１（ＳＫ１）

ＳＫ１は，四拾貫小原16号古墳の横穴式石室の掘方の北側肩部と重複しており，石室構築時に大きく削平されたものと考えられ，全容は不明である。土坑は平面隅丸長方形を呈すると考え



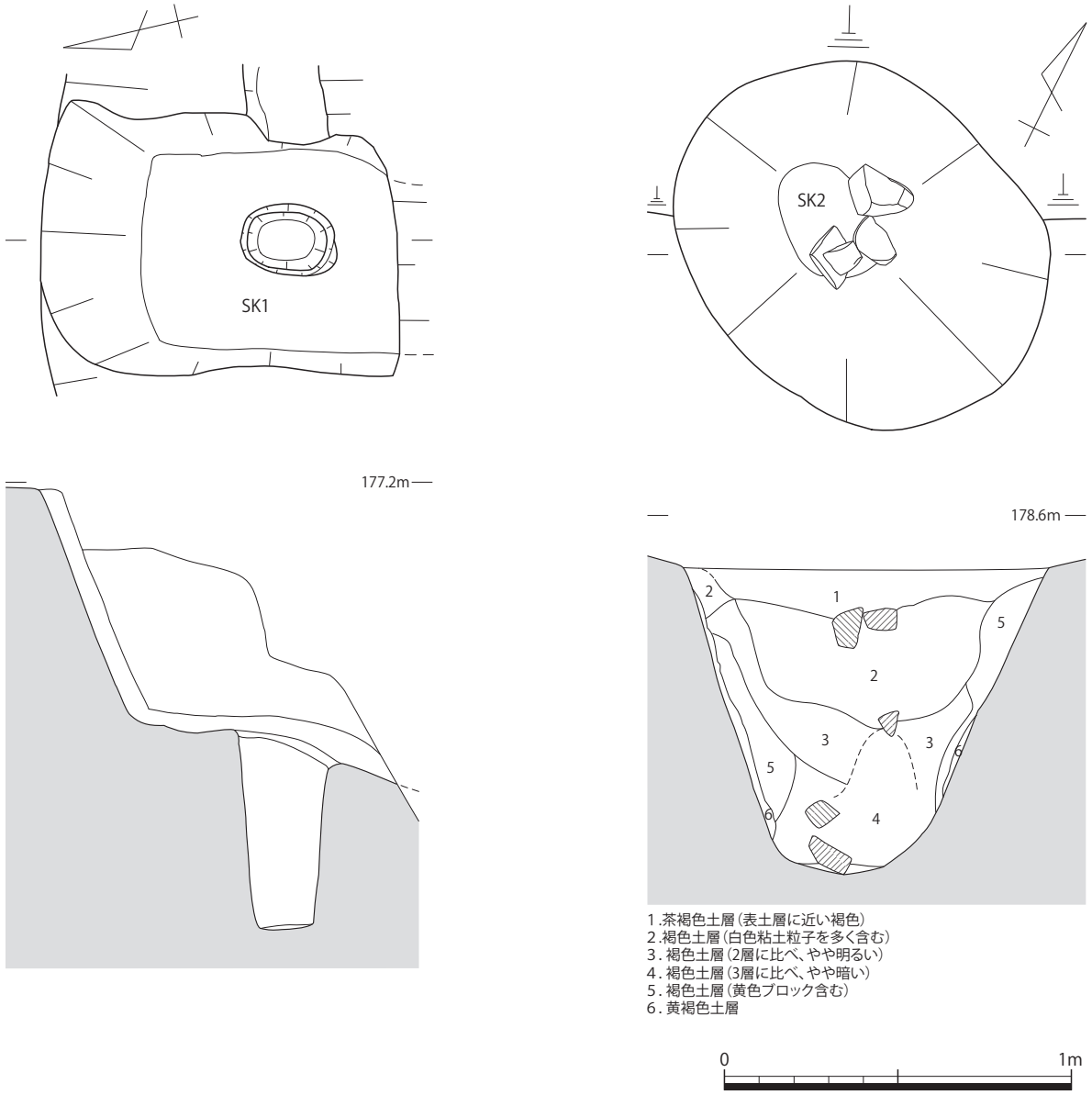
第17図　積石塚土坑実測図（1：20）

られ，上面(上端)で東西(現存)77㎝，南北103㎝以上，底面(下端)で東西58㎝，南北74㎝以上，深さ約70㎝であり，底面中央に楕円形を呈する上面(上端)で長径27㎝，短径21㎝，底面(下端)で長径16㎝，短径12㎝，深さ58㎝のピットが穿たれている。

土坑２(ＳＫ２)

ＳＫ２は古墳墳丘頂部から北東方向約15ｍの位置にあり，工事で削平された崖面となった場所で検出した。土坑は一部削平されていたが，平面楕円形を呈し，上面(上端)で長径(現存)115㎝，短径(現存)91㎝，底面(下端)で長径31㎝，短径24㎝のやや皿底状を呈し，深さ90㎝である。土坑内には上層から下層にかけて礫が５個落ち込んでいた。

ＳＫ１・２からは遺物が出土していないが，形態等から落とし穴と考えられる。



第18図　土坑１・２実測図(1：20)

Ⅴ　ま　と　め

この調査では，横穴式石室を埋葬施設とする古墳１基，中世の可能性がある積石塚の墳墓１基，落とし穴と考えられる土坑２基を明らかにした。調査期間等の条件から十分な調査が行えたとはいえないが，三次地域を代表する２大古墳群のうちの四拾貫古墳群では初めての横穴式石室の古墳の調査であり，しかも遺存状態もよく，三次地域における横穴式石室研究にとって貴重な資料といえる。ここではこの四拾貫小原第16号古墳について若干の整理を行い，まとめとする。

四拾貫小原第16号古墳は方墳と考えられ，無袖式の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。閉塞石の位置から一部天井石を欠いているが，石室はほぼ完存している。石室は，南（Ｎ５°Ｗ）に開口しており，石室の面積は9.92㎡で，玄室面積は6.70㎡である。横穴式石室の古墳としては，旧三次市内で調査された古墳と比べても比較的大形の石室といえる[1]。玄室内では棺台石が２か所で検出された。棺台石と鉄釘の分布状況から奥壁側の棺台石，西側壁寄りの棺台石とその東側の鉄釘集中部から少なくとも３棺を想定することができる。

石室からは多くの須恵器，鉄釘をはじめ，土師器，鉄鏃，馬具，鉄滓が出土している。主な出土状況をみると，玄室では奥壁付近から須恵器(提瓶・それに伴う蓋，平瓶，高杯)，玄室の奥壁付近から入り口付近の棺台石の付近では多量の釘，玄室入口付近の東側壁よりで多くの須恵器(杯蓋，杯身，高杯，はそう，台付長頸壺，蓋）と暗文土師器（杯，皿)，羨道部・封鎖石から前庭部にかけての付近からは須恵器（平瓶，台付長頸壺，高杯，蓋，器形不明のつまみ，装飾付き須恵器の高杯)，鉄滓が出土しており，玄室内では土器を大きく２か所に分けることができる。また，鉄釘が144本出土しており，そのうち鉄釘の頭部があるものは103本あり，非常に多く出土しており注目される。

これらの出土遺物の中で，須恵器の台付長頸壺の３点の壺は，口縁端部が断面逆Ｌ字状を呈する特徴的な形態の器形のもので，宮の本第20号古墳に同形のものが出土し，また，門田敦盛第４号古墳から類似のものが出土しており，地域色ある須恵器と考えられる[2]。暗文土師器は皿と杯が出土しており広島県内では30遺跡余で確認されており，三次市内でも馬洗川を介して対岸の天狗松第５号古墳から３点，同第６号古墳から１点出土している。暗文土師器の出土は鉄・鉄器生産との関わりが指摘されている[3]。本古墳からは鉄滓が出土しており[4]，鉄・鉄器生産を介して畿内との関わりをもった被葬者を示すものと考えられる。

出土した須恵器は６世紀後半から７世紀初めのものもあるが，出土状態が不明瞭，破片や量的に少ないなどの状況である。石室内でまとまって出土し，完形品の多くは飛鳥Ⅱ期に比定されるものである。中でも量的に多い杯蓋・杯身は当該期に比定したが，口径・器高から２つに分けられそうである。また，量的には少ないが，飛鳥Ⅲ～Ⅴ期のものもあり，５個体出土している台付長頸壺は当該期のものと考えられる[5]。従って，四拾貫第16号古墳の時期は，７世紀中葉から後葉を中心としたもので，棺台石，鉄釘の本数や，土器の出土状況などから３体以上埋葬，複数回の追葬があったものと考えられる。

【註】

（1）三次市史編纂委員会「三次市史Ⅱ」2004年３月を基に整理すると，粟屋高塚古墳19.7㎡，久々原第２号古墳14.6㎡，寺川古墳13.2㎡，若屋第９号古墳9.0㎡，岩脇大久保第１号古墳8.6㎡，大山大平山第22古墳8.0㎡，高平第１号古墳3.7㎡，宗祐池西第21号古墳2.8㎡である。

（2）濵岡大輔「古墳から出土した香炉の謎－門田敦盛古墳群（三次市）の発掘から－」『平成27年度ひろしま考古学講座Ⅳ－発掘から推理する－第５回（資料）』（公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室）にまとめられている。

宮の本第20号古墳からは台付長頸壺が２点出土し，そのうちの１点は口縁端部が逆Ｌ字状を呈するものである。また，土師器の杯Ｃ類２点，小形の皿Ａ類？１点が出土している。なお，この古墳は地形測量図・写真等から方墳の可能性があるのではなかろうか。財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』平成25（2013）年

（3）安間拓巳「暗文土師器出土遺跡の研究」『中国地方古代・中世村落の歴史的景観の復元的研究』（平成12年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書）平成16（2004）年

広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第５篇（広島県双三郡三次市史料総覧刊行会）昭和49年には天狗松第５号古墳：円墳（直径11ｍ，高さ1.5ｍ），横穴式石室（長さ6.2ｍ，幅1.45ｍ，高さ1.8ｍ）で杯Ｃ類（大小）２点，皿Ａ類１点の写真がある。

天狗松第６号古墳：墳丘破壊著しく不明，横穴式石室（長さ８ｍ，幅1.2ｍ，高さ1.5ｍ）特異な形態の台付長頸壺出土

（4）財団法人広島文化財団『別所古墳発掘調査報告書』2010年には，広島県内の鉄滓が出土した古墳は12例あげられている。

三次市内の横穴式石室から鉄滓が出土した例としては，天狗松第４号古墳（南畠敷町），宗祐池西第21号古墳（南畑敷町），岩脇大久保古墳（粟屋町），和知白鳥第３号古墳があげられている。

（5）菱田哲郎「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』（同成社）2011年

第１表　四拾貫小原第16号古墳出土土器観察表

遺物番号	種別 器種	出土位置	法量(cm) 口径	受部径	体部最大径	高台径 脚底径	器高	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	須恵器 杯蓋	石室内	11.7～ 12.0				3.2	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部ヘラ削り後ナデ	(内・外)暗灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	若干焼き歪みあり
2	須恵器 坏蓋	石室内	8.5～ 10.0				1.7	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部時計回り回転ヘラ削り	(内・外)暗灰色	径1㎜前後の小砂粒含む	良好	No.22とセットか
3	須恵器 小型蓋	石室内	8.9				現存 (1.9)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部カキ目調整	(内・外)灰色	1㎜程度の小砂粒若干含むが胎土精良	良好	若干焼き歪みあり
4	須恵器 坏蓋	石室内	8.7～ 9.8				3.2	(内)時計回り回転ナデ (外)回転ナデ～天井部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)灰色	1㎜程度の砂粒若干含む	良好	焼き歪みあり 一部に自然釉付着
5	須恵器 蓋	石室内	8.0				3.8	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～上部細いカキ目調整～下部平坦部櫛歯状工具刺突文	(内・外)灰色	微砂粒含むが胎土精良	良好	出土状況からNo.45の蓋と考えられる
6	須恵器 杯蓋	石室内	10.1				3.0	(内)回転ナデ～ナデ仕上げ (外)回転ナデ～天井部回転ヘラ削り	(内・外)灰色	3㎜前後の小砂粒若干	良好	器表面に緑色の自然釉付着 No.7とほぼ同型同大で製作手法も同様 No.24とセットか
7	須恵器 杯蓋	石室内	10.2				3.3	(内)時計回りの回転ナデ (外)回転ナデ～天井部回転ナデ前に回転ヘラ削りか	(内・外)灰色	1㎜前後の小砂粒含む	良好	器表面に緑色の自然釉付着 No.6とほぼ同型同大で製作手法も同様 No.23とセットか
8	須恵器 杯蓋	石室内	10.2				3.0	(内)時計回り回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～天井部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)暗灰色	1～5㎜前後の小砂粒含む	良好	
9	須恵器 杯蓋	石室内	11.0				2.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部ヘラ削り後回転ナデ	(内・外)淡灰色	1㎜程度の小砂粒若干含む	良好	つまみ部欠失
10	須恵器 杯蓋	石室内	11.2				3.4	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部回転ヘラ削り	(内・外)灰色	小砂粒やや多く含む	良好	器表面に緑色の自然釉付着
11	須恵器 杯蓋	石室内	10.2				3.4	(内)時計回り回転ナデ (外)回転ナデ～天井部回転ヘラ削り	(内)黒灰色 (外)自然釉	1～2㎜の小砂粒多く含む	良好	器表面全体に自然釉付着 No.18とセットか
12	須恵器 杯蓋	石室内	10.3				2.9	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部ヘラ削り後回転ナデ	(内・外)暗灰色	微砂粒含む	良好	器表面の1/2に緑色の自然釉付着
13	須恵器 杯蓋	石室内	10.2				3.0	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～天井部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)灰色	1～3㎜程度の小砂粒含む	良好	
14	須恵器 杯蓋	石室内	9.6～ 10.7				3.4	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部ヘラ削り後時計回りの回転ナデ	(内・外)灰色	1㎜前後の小砂粒多く含む	良好	No.28とセットか
15	須恵器 杯蓋	石室内	11.1				3.2	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～天井部ヘラ削り後横ナデ調整	(内・外)淡灰色～灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	No.32とセットか
16	須恵器 杯蓋	石室内	16.2				1.5	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部時計回り回転ヘラ削り	(内・外)灰色～暗灰色	微砂粒含むが胎土精良	良好	
17	須恵器 杯身	石室内	8.7				3.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～逆時計回りの回転ヘラ削り～時計回りのナデ	(内・外)灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	
18	須恵器 杯身	石室内	9.0				3.5	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～ヘラ切り後一部斜位ヘラ削り	(内・口縁部外)黒灰色 (他の外)灰色	1～2㎜の砂粒まばらに含む	良好	No.11とセットか 色・形態とも特異な印象を受ける
19	須恵器 杯身	石室内	9.7				3.3	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～底部ヘラ切り離し	(内・外)黒色	1㎜程度の小砂粒含む	良好	黒色で他とは全く異なる異様な雰囲気をもつ
20	須恵器 杯身	石室内	8.9				3.4	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)暗灰色	1～2㎜の砂粒多く含む	良好	器表面全体に緑色の自然釉付着
21	須恵器 杯身	石室内	8.9				3.8	(内)時計回り回転ナデ (外)回転ナデ～底部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)暗灰色～黒灰色	1㎜程度の小砂粒含む	良好	
22	須恵器 杯身	石室内	9.2				3.8	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り(時計回り)	(内)黒色に近い暗灰色 (外)暗灰色	1㎜前後の長石等小粒含む	良好	器表面全体の1/4に白斑 No.2とセットか
23	須恵器 坏身	石室内	9.6～ 10.0				3.4	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部ヘラ切り離し	(内)灰色 (外)暗灰色	1～3㎜前後の砂粒含む	良好	若干歪みあり No.7とセットか
24	須恵器 杯身	石室内	9.5				2.9	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～底部一方向ヘラ削り	(内)淡灰色 (外)暗灰色	1～3㎜前後の砂粒含む	良好	No.6とセットか
25	須恵器 杯身	石室内	9.3				3.6	(内)時計回り回転ナデ (外)回転ナデ～底部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)灰色～黒灰色	1㎜の小砂粒子含む，3㎜の砂粒も含む	良好	口縁部約2/3欠失
26	須恵器 杯身	石室内	10.0				3.0	(内)回転ナデ～底部回転ナデ後仕上げナデ (外)回転ナデ～底部ヘラ切り後ナデ仕上げ	(内・外)淡灰色～黒灰色	1㎜程度の小砂粒多く含む	良好	
27	須恵器 杯身	石室内	9.7				3.1	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り後一方向ナデ	(内)灰色 (外)暗灰色	1㎜程度の小砂粒多く含む	良好	1/6を欠失

遺物番号	種別 器種	出土位置	法量(cm) 口径	受部径	体部最大径	高台径 脚底径	器高	調整	色調	胎土	焼成	備考
28	須恵器 杯身	石室内	10.2				2.9	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り後一方向ナデ	(内・外)灰色	径1㎜前後の小砂粒多く含む	良好	No.14とセットか 器表面の一部に黒灰色の釉付着
29	須恵器 杯身	石室内	10.4				3.2	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部ヘラ削り後一方向ナデ	(内・外)淡灰色～一部暗灰色	2～5㎜前後の砂粒若干含む	良好	
30	須恵器 杯身	石室内	8.6				2.4	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～一部横方向静止ヘラ削り～底部一方向ナデ	(内・外)灰色～暗灰色	1～2㎜の砂粒含む	良好	
31	須恵器 杯身	石室内	9.6				2.8	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部静止ヘラ削り	(内・外)灰色	1～2㎜の砂粒含む	良好	
32	須恵器 杯身	石室内	11.5				3.7	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部逆時計回りヘラ切り	(内・外)灰色	1㎜前後の小砂粒含む	良好	No.15とセットか
33	土師器 皿	石室内	21.4				3.1	(内)ナデ後暗文，底部螺旋暗文～壁面放射暗文 (外)指頭圧痕	(内・外)赤橙色	緻密で精選された胎土	良好	
34	土師器 杯	石室内	10.5				3.2	(内底部螺旋暗文～放射暗文(2段) (外)丁寧なヘラ磨き	(内・外)赤橙色	緻密で精選された胎土	良好	
35	須恵器 高杯	石室内	9.6			7.2 脚部高 4.0	7.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～脚柱部に沈線	(内・外)淡灰色～黒灰色	小砂粒若干含む	良好	No.36と同じ作り（同型式）
36	須恵器 高杯	石室内	9.5			6.8 脚部高 4.2	7.4	(内) 回転ナデ (外)回転ナデ～脚柱部に沈線	(内・外)淡灰色～黒灰色	小砂粒若干含む	良好	No.35と同じ作り（同型式）
37	須恵器 高杯	石室内	9.7			8.0 脚部高 4.7	8.9	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～逆時計回りヘラ削り～脚柱部に浅い沈線	(内・外)淡灰色	微砂粒多く含む	良好	杯部内面の全体と器表面の1/3に緑色の自然釉付着
38	須恵器 高杯	石室内	9.3			7.4 脚部高 4.3	8.6	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)暗灰色	微砂粒多く含む	良好	器表面片面に暗緑色の自然釉付着
39	須恵器 高杯	石室内	9.7～ 10.5			8.4 脚部高 4.5	8.5	(内)回転ナデ (外)時計回り回転ナデ～ヘラ削り後回転ナデ～脚柱部に浅い沈線	(内・外)暗灰色	微砂粒含む	良好	口縁部に若干歪みあり 脚端部内側にかえりがある特異な形態
40	須恵器 高杯	石室内	10.4			8.1 脚部高 4.6	8.6	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～杯底部にカキ目状の回転調整	(内・外)淡灰色	小砂粒若干含む	良好	
41	須恵器 高坏	石室内	14.4			9.4 脚部高 3.1	7.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～時計回り回転ヘラ削り	(内・外)白灰色	1～3㎜の砂粒若干含む	やや軟	器表粗れ著しい
42	須恵器 はそう	石室内	9.9		9.5		12.8 体部高 7.1	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～回転ヘラ削り，口縁部と体部に沈線	(内・外)暗灰色	小砂粒含む	良好	斜位に穿孔
43	須恵器 平瓶	石室内	6.9		17.0		14.3 体部高 10.0	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部静止ヘラ削り	(内・外)淡灰色～灰色	1㎜前後の小砂粒多く含む	良好	約1/2に緑色の自然釉付着
44	須恵器 平瓶	石室内	5.8		(14.7)		復元 (11.4) (7.7)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～回転ヘラ削り	(内・外)青灰色 (断面)淡黄白色	1～2㎜程度の小砂粒含む	良好 堅緻	口縁部に対して体部が著しく小形
45	須恵器 提瓶	石室内	6.2		16.0		22.2 体部高 16.3	(内)頸部回転ナデ (外)回転利用によるヘラ描沈線10本同心円状に廻らせている。頸部は回転ナデ	(内・外)灰～暗灰色	1㎜前後の小砂粒を若干含む	良好	
46	須恵器 高杯部	石室内	6.0				現存 (5.9)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ～脚柱部に浅い沈線	(内・外) 灰色	微砂粒含むが胎土精良	良好	装飾子持付須恵器の高杯部
47	須恵器 つまみ又は装飾部	石室内	最大径 2.2				現存 (3.7)	(外)櫛歯状工具の連続刺突～回転ナデ	(外)灰色	胎土精良	良好	特異な遺物
48	須恵器 台付長頸壺	石室内	6.5		18.5	11.1 高台高 2.3	20.4	(内)回転ナデ (外)頸部回転ナデ～ヘラによる浅い沈線～肩ヘラによる3本の沈線・その間に2段の櫛歯状連続刺突文～体部下半部回転ヘラ削り後回転ナデ～台部回転ナデ～ヘラ状工具突き刺しによる透かし孔(4方向)	(内・外)淡灰色～黒灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	体部上半部は緑色の自然釉付着 口縁端部が逆L字形を呈する特色ある形態
49	須恵器 台付長頸壺	石室内	6.7		17.8	10.7 高台高 2.5	21.7	(内)回転ナデ (外)頸部回転ナデ～ヘラによる浅い沈線2本～肩部ヘラによる3本の沈線・その間に2段の櫛歯状連続刺突文～体部下半部回転横方向ヘラ削り後回転ナデ～台部回転ナデ～ヘラ状工具突き刺しによる透かし孔(4方向)	(内・外)淡灰色～灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	口縁端部が逆L字形を呈する特色ある形態

遺物番号	種別器種	出土位置	法量(cm) 口径	受部径	体部最大径	高台径脚底径	器高	調整	色調	胎土	焼成	備考
50	須恵器台付長頸壺	石室内	6.7		17.8	10.7 高台高 2.5	21.7	(内)回転ナデ (外)頸部回転ナデ～ヘラによる浅い沈線２本～肩部ヘラによる３本の沈線・その間に２段の櫛歯状連続刺突文～体部下半部回転横方向ヘラ削り後回転ナデ～台部回転ナデ～ヘラ状工具突き刺しによる透かし孔(3方向)	(内・外)淡灰色～灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	肩全体に緑色の自然釉付着～体部下半部の1/6と台部の全体に自然釉付着 口縁端部が逆L字形を呈する特色ある形態
51	須恵器台付長頸壺	石室内	6.7		21.7	12.5 高台高 1.7	23.0	(内)頸部回転ナデ～回転ナデ～ヘラ削り (外)頸部回転ナデ～ヘラによる浅い沈線２本～肩部細かいカキ目調整～体部下半部回転ナデと細かいカキ目調整～台部回転ナデ	(内・外)淡灰色～灰色	1㎜前後の小砂粒含むが胎土は精良	良好	器表面の約1/3に緑色の自然釉付着 焼き歪みで歪みあり
52	須恵器大甕	羨道部西側	12.6		35.0		20.0	(内)回転ナデ－同心円タタキ (外)回転ナデ－平行タタキ	(内・外)灰白色	砂粒を含む	良好	
53	須恵器杯蓋	羨道部	13.6				現存(3.5)	(内)回転横ナデ (外)回転横ナデ～天井部時計回り回転ヘラ削り	(内・外)淡灰色	1㎜前後の小砂粒含む	良好	内面全体自然釉かかる 焼き歪みあり
54	須恵器杯身	石室内	9.8				2.6	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り後ヘラナデつけ	(内・外)灰色～黒灰色	1～2㎜前後の小砂粒多く含む	良好	器壁厚い
55	須恵器杯身	石室内	11.4				3.2	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り後一方向ナデ	(内・外)淡灰色～灰色	小砂粒含むが胎土比較的精良	良好	焼き歪みあり 口縁部一部欠失
56	須恵器平瓶口縁	石室内	6.2				現存(4.0)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)暗灰色	胎土精良	良好	
57	須恵器高杯部	羨道部	5.6				現存(2.9)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)灰色	胎土精良	良好	装飾子持付須恵器の高杯部
58	須恵器杯蓋	羨道部入口西側	10.2				3.4	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～ヘラ削り～回転ナデ	(内)暗灰色 (外)淡灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	
59	須恵器杯蓋	前庭＋羨道前部	10.4				3.0	(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ～回転ヘラ削り～回転ナデ	(内)暗灰色 (外)淡灰色	1～2㎜の小砂粒含む	良好	約1/2欠失
60	須恵器杯蓋		復元(10.6)				現存(1.9)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～天井部逆時計回り回転ヘラ削り	(内・外)灰色	胎土精良	良好	器表面に一部自然釉付着3/4欠失
61	須恵器杯蓋	(羨道前部)	不明				現存(2.8)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)灰色	緻密で精良	良好	
62	須恵器杯蓋		(12.0)				現存(2.2)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～ヘラ削り後回転ナデ	(内・外)暗灰色	精良	良好	5/6欠失
63	須恵器杯身		10.4				3.5	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～底部回転ヘラ削り後回転ナデ	(内・外)淡灰色～灰色	微砂粒含む 胎土比較的精良	良好	若干焼き歪みあり 口縁部1/2強欠失
64	須恵器椀又は鉢	石列西側	(17.5)					(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)暗灰色 (断面)セピア色	1㎜程度の砂粒を多く含み3×4㎜の大粒砂粒も含む	良好	
65	須恵器台付長頸壺	石列西側			15.7	10.4 高台高 1.0	現存(18.2)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～回転ヘラ削り～回転ナデ	(内・外)灰色	小さな砂粒を含む	良好	肩部に緑色の自然釉付着
66	須恵器甕(口縁部	石列西側						(内)回転ナデ (外)回転ナデ＋ヘラ描文～カキ目＋波状文	(内・外)灰色	微砂粒若干含むが胎土は精良	良好	
67	須恵器甕(頸部)	石列西側						(内)回転ナデ～同心円タタキ (外)カキ目～回転ナデ	(内・外)灰色	砂粒少なく胎土良	良好	
68	須恵器甕(体部)	石列西側						(内)同心円タタキ (外)格子目タタキ	(内・外)灰色	砂粒を含む	良好	同一個体と考えられる破片30点程度あり
69	須恵器蓋	周溝1区	(17.2)					(内)回転ナデ～仕上げナデ (外)回転ナデ	(内・外)灰色	胎土精良	良好	
70	須恵器椀	周溝2区						(内)回転ナデ (外)回転ナデ～ヘラ切り離し後ナデか？	(内・外)灰色	胎土精良	良好	
71	須恵器短頸壺	周溝1区	7.6					(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)暗灰色	胎土精良	良好	
72	須恵器杯蓋	表土						(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)灰色～暗灰色	1㎜前後の砂粒まばらに含む	良好	
73	須恵器杯身	Dトレンチ北側	(11.8)	(15.0)				(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内・外)灰色	1㎜程度の小砂粒若干含む	良好	
74	須恵器杯身		(11.2)	(13.4)			現存(3.1)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～回転ヘラ削り	(内・外)灰色	胎土精良	良好	緑色の自然釉付着痕
75	須恵器高杯		11.6～12.6			9.2	7.6	(内)回転ナデ (外)回転ナデ～カキ目～回転ナデ	(内・外)暗灰色～黒灰色	1㎜前後の小砂粒多く含む	良好	口縁部歪みあり
76	須恵器台付杯		10.0			6.0 高台高 0.9	4.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)淡灰色 (外)暗灰色	1㎜前後の小砂粒多く含む	良好	

遺物番号	種別 器種	出土位置	法量(cm) 口径	受部径	体部最大径	高台径 脚底径	器高	調整	色調	胎土	焼成	備考
77	須恵器 平瓶		6.2		(14.0)		(10.2)	(内)回転ナデ～ヘラ削り (外)回転ナデ～ヘラ削り後回転ナデ？（時計回り	(内・外)灰色	微砂粒含むが胎土は良い	良好	器表面に緑色の自然釉付着
78	須恵器 甕	表土						(内)同心円タタキ (外)平行タタキ	(内・外)灰色	胎土精良	良好	
79	須恵器 短頸壺	表土	(13.7)					(内)回転ナデ～同心円タタキ (外)回転ナデ	(内・外)暗灰色	胎土精良	良好	ヘラ記号あり
80	須恵器 壺？	表土						(内)ナデ？ (外)沈線＋波状文2段	(内・外)淡灰色	胎土精良	良好	
81	縄文土器 深鉢	Dトレンチ排土						(内)条痕 (外)条痕	(内・外)暗茶褐色	0.5～1㎜の小砂粒若干含む	やや軟	

第２表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄釘観察表

No.	法量（単位cm　※：復元値，括弧：現在値） 長さ	幅	厚さ	備考
82	(5.9)	0.4～1.1	0.4	折頭形，先端欠失
83	7.4	0.3～0.6	0.5	
84	8.4	0.4～0.5	0.4	
85	※9.7	0.5～1.2	0.5	折頭形，先端欠失
86	(5.0)	0.5～0.7	0.5	
87	(3.3)	0.4～0.6	0.6	頭部・先端欠失
88	(4.9)	0.3～0.5	0.5	頭部欠失
89	(4.0)	0.4～1.1	0.5	折頭形，先端欠失
90	※9.6	0.4～1.1	0.6	折頭形
91	(5.2)	0.4～0.5	0.5	頭部欠失
92	7.3	0.3～0.6	0.4	折頭形
93	(5.3)	0.4～0.5	0.4	頭部欠失
94	(4.6)	0.4～1.0	0.5	折頭形，先端欠失
95	(6.5)	0.3～1.1	0.5	折頭形，先端欠失
96	※6.5	0.4～1.1	0.5	折頭形，先端欠失
97	(3.8)	0.2～1.1	0.4	折頭形，先端欠失，横木目あり
98	(3.7)	0.3～0.8	0.5	折頭形，先端欠失，縦木目あり
99	(2.8)	0.4	0.4	頭部・先端欠失
100	(5.3)	0.3～0.6	0.5	頭部・先端欠失
101	(7.0)	0.4～0.9	0.4	折頭形，先端欠失
102	7.4	0.4～0.8	0.4	折頭形
103	(3.2)	0.3～0.9	0.5	折頭形，先端欠失，横木目あり
104	(6.1)	0.4～1.0	0.4	折頭形，先端欠失
105	(5.7)	0.2～0.5	0.5	頭部欠失
106	9.6	0.4～1.1	0.5	折頭形
107	8.5	0.2～1.0	0.5	折頭形
108	(5.3)	0.5～0.8	0.5	折頭形，先端欠失
109	(3.8)	0.2～0.5	0.4.	頭部欠失
110	8.3	0.2～1.0	0.5	折頭形
111	9.0	0.2～0.9	0.4	折頭形
112	※10.3	0.3～0.9	0.4	折頭形
113	7.8	0.2～1.0	0.5	折頭形
114	(3.9)	0.2～0.6	0.5	頭部欠失
115	8.4	0.2～1.0	0.4	折頭形
116	7.6	0.2～1.1	0.5	折頭形
117	(5.6)	0.2～0.6	0.6	頭部欠失，横木目あり
118	8.9	0.2～0.8	0.4	折頭形
119	※8.7	0.3～0.8	0.5	折頭形
120	(5.5)	0.5～0.8	0.4	折頭形，先端欠失
121	(6.0)	0.3～0.9	0.4	折頭形，先端欠失

No.	法量（単位cm　※：復元値，括弧：現在値） 長さ	幅	厚さ	備考
122	8.5	0.2～1.1	0.4	折頭形
123	(7.5)	0.2～1.1	0.5	折頭形，先端欠失
124	9.0	0.3～1.1	0.5	折頭形
125	8.2	0.2～1.0	0.5	折頭形
126	8.5	0.2～1.0	0.5	折頭形
127	9.5	0.4～0.8	0.4	折頭形，先端湾曲
128	7.1	0.2～1.1	0.4	折頭形
129	(6.7)	0.2～0.5	0.5	頭部欠失
130	(3.4)	0.2～0.7	0.6	頭部欠失
131	8.0	0.2～1.1	0.4	折頭形
132	(7.1)	0.3～0.5	0.5	頭部欠失
133	7.2	0.2～07	0.5	折頭形
134	8.7	0.2～0.6	0.5	
135	7.7	0.2～0.5	0.4	折頭形，先端屈曲
136	8.0	0.2～0.5	0.5	横木目あり
137	(4.4)	0.5～1.2	0.5	折頭形，先端欠失，横木目あり
138	10.9	0.2～1.1	0.5	折頭形，頭部下屈曲
139	8.7	0.2～0.7	0.5	折頭形
140	(5.5)	0.2～0.8	0.5	折頭形，先端欠失
141	(5.6)	0.2～0.4	0.4	頭部欠失，縦木目あり
142	7.6	0.2～0.6	0.5	
143	9.1	0.3～1.0	0.5	折頭形
144	(7.3)	0.3～1.0	0.4	折頭形，先端欠失
145	(4.2)	0.4	0.4	頭部・先端欠失
146	8.7	0.2～0.8	0.4	折頭形
147	7.8	0.2～0.5	0.5	
148	8.6	0.2～0.4	0.4	
149	8.4	0.2～0.9	0.5	折頭形
150	8.5	0.2～0.5	0.4	
151	(6.5)	0.2～0.5	0.5	頭部欠失
152	※7.4	0.4～1.0	0.4	折頭形，先端欠失
153	6.4	0.4～0.7	0.4	折頭形
154	9.6	0.2～1.0	0.5	折頭形
155	(2.9)	0.2～0.5	0.5	頭部欠失
156	(5.0)	0.1～0.4	0.4	頭部欠失
157	(2.0)	0.2～0.5	0.5	頭部欠失
158	6.7	0.2～0.5	0.5	
159	(3.3)	0.2～0.4	0.4	頭部・先端欠失
160	7.9	0.2～0.5	0.5	
161	(5.1)	0.2～0.5	0.4	頭部欠失

No.	法量（単位cm　※：復元値，括弧：現在値）			備考
	長さ	幅	厚さ	
162	(2.2)	0.4 ～ 0.7	0.4	折頭形，先端欠失
163	(3.5)	0.3 ～ 0.4	0.4	頭部・先端欠失
164	(2.0)	0.4	0.4	頭部・先端欠失
165	7.4	0.3 ～ 0.5	0.5	
166	(3.0)	0.3 ～ 0.5	0.5	頭部・先端欠失，縦木目あり
167	(5.2)	0.4 ～ 0.5	0.4	先端欠失
168	7.0	0.2 ～ 1.0	0.5	折頭形
169	8.8	0.2 ～ 0.5	0.4	横・縦木目あり
170	(4.0)	0.3 ～ 0.4	0.4	先端欠失
171	8.4	0.2 ～ 0.5	0.4	
172	(3.1)	0.5	0.5	頭部・先端欠失
173	(4.4)	0.3 ～ 0.4	0.4	先端欠失
174	(4.9)	0.2 ～ 0.5	0.5	頭部欠失
175	(3.0)	0.4 ～ 0.7	0.4	折頭形，先端欠失
176	(5.0)	0.2 ～ 0.9	0.5	折頭形，先端欠失
177	(5.9)	0.4 ～ 0.5	0.4	頭部欠失
178	(5.3)	0.2 ～ 0.5	0.4	頭部欠失
179	(1.9)	0.4	0.4	頭部・先端欠失
180	(4.0)	0.4 ～ 0.8	0.5	折頭形，先端欠失
181	(3.0)	0.2 ～ 0.4	0.4	頭部欠失
182	8.0	0.2 ～ 0.4	0.4	
183	9.0	0.2 ～ 1.0	0.4	折頭形
184	9.6	0.3 ～ 0.9	0.5	折頭形
185	8.9	0.2 ～ 1.1	0.5	折頭形
186	7.7	0.3 ～ 0.8	0.4	折頭形
187	7.4	0.2 ～ 0.5	0.5	
188	9.0	0.2 ～ 0.9	0.5	折頭形
189	※7.6	0.2 ～ 0.5	0.4	折頭形
190	(6.9)	0.2 ～ 0.5	0.5	頭部欠失
191	(6.1)	0.4 ～ 1.4	0.5	折頭形，先端欠失
192	10.0	0.2 ～ 0.6	0.5	横木目あり
193	7.4	0.2 ～ 1.0	0.5	折頭形

No.	法量（単位cm　※：復元値，括弧：現在値）			備考
	長さ	幅	厚さ	
194	(4.0)	0.5	0.5	頭部・先端欠失，横木目あり
195	7.6	0.2 ～ 0.5	0.4	
196	9.3	0.2 ～ 0.9	0.5	折頭形
197	(3.9)	0.3 ～ 1.1	0.3	折頭形，先端欠失
198	9.3	0.2 ～ 1.2	0.5	折頭形
199	※6.4	0.2 ～ 0.9	0.5	折頭形
200	(6.2)	0.4 ～ 1.2	0.6	折頭形，先端欠失
201	6.6	0.2 ～ 0.8	0.3	折頭形
202	(4.7)	0.2 ～ 0.6	0.5	頭部欠失
203	8.3	0.2 ～ 0.5	0.4	
204	※8.7	0.3 ～ 0.6	0.5	先端部屈曲
205	(4.9)	0.4 ～ 1.0	0.4	折頭形，先端欠失
206	8.7	0.2 ～ 0.5	0.5	
207	(5.3)	0.2 ～ 0.5	0.5	頭部欠失
208	7.1	0.2 ～ 0.4	0.4	
209	(4.5)	0.2 ～ 0.5	0.4	頭部欠失
210	(6.5)	0.4	0.4	先端欠失
211	(2.9)	0.4 ～ 0.5	0.5	先端欠失
212	7.7	0.2 ～ 0.5	0.5	
213	9.0	0.2 ～ 0.5	0.4	折頭形
214	(5.1)	0.2 ～ 0.3	0.3	頭部欠失
215	(4.4)	0.4 ～ 0.6	0.6	先端欠失
216	(2.5)	0.3 ～ 0.4	0.3	頭部・先端欠失
217	6.8	0.2 ～ 0.5	0.5	
218	(6.0)	0.3 ～ 0.9	0.4	折頭形，先端欠失
219	(3.0)	0.2 ～ 0.4	0.4	頭部欠失
220	(1.1)	0.2 ～ 0.3	0.3	先端のみ
221	(1.9)	0.2~0.5	0.4	先端のみ
222	(5.8)	0.3 ～ 0.5	0.5	先端欠失
223	(3.7)	0.4	0.4	頭部・先端欠失
224	(3.5)	0.4	0.4	先端欠失
225	(6.7)	0.4 ～ 0.5	0.5	先端欠失

第３表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄器観察表

No.	品種	法量（単位cm・g，※；復元値，括弧；現存値）				備　　考
		長さ	幅	厚さ	重さ	
226	鉄鏃	※10.5	0.4 ～ 3.0	0.1 ～ 0.5	28	方頭鏃ＢⅡ形式（鑿頭式），断面長方形
227	鉄鏃	※10.5	0.4 ～ 3.1	0.5	30	方頭鏃ＢⅡ形式（鑿頭式），断面長方形
228	鉸具	8.8	5.6	0.8	—	馬具
229	輪金	7.8	4.0	0.5	—	馬具
230	Ｕ字形金具	11.7	4.9	0.6	—	木心鉄三角錐形壺鐙の基部

第４表　四拾貫小原第16号古墳出土鉄滓一覧表

No.	重さ（g）
231	3
232	48
233	38
234	23
235	17

No.	重さ（g）
236	72
237	53
238	115
239	80
240	52

図　　版

四拾貫小原古墳群全景（南から　2016年撮影）

１．遺跡状況
（北西から）

２．古墳全景
（北東から）

３．古墳全景
（北から）

1．古墳全景
（西から）

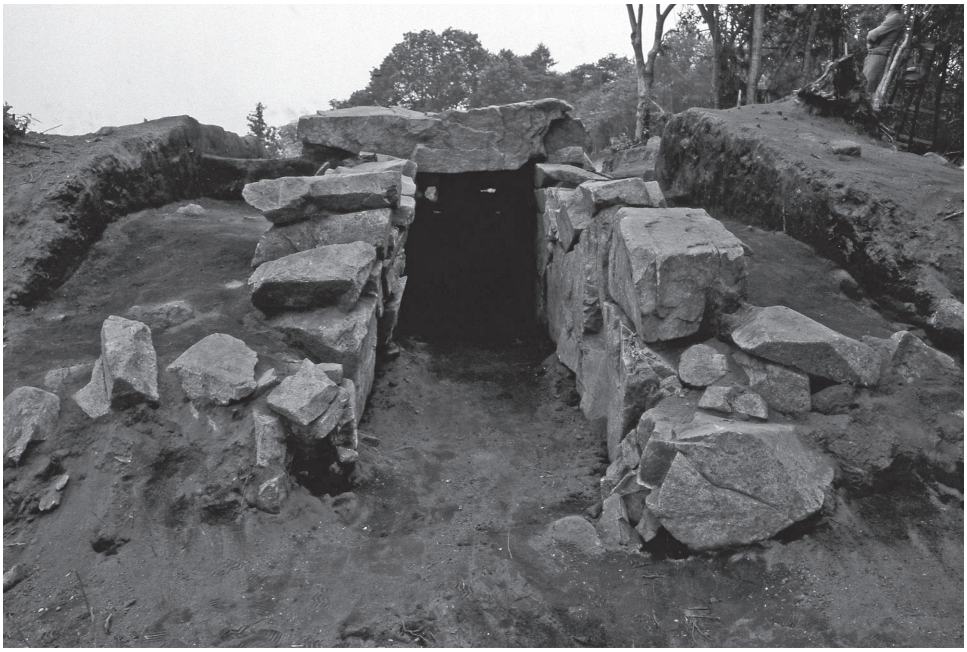
2．古墳墳丘
（南西から）

3．古墳墳丘
（南から）

１．古墳全景
（前庭部　南東から）

２．古墳全景・外護列石
（東側　南東から）

３．古墳全景・外護列石
（西側　南東から）



１．横穴式石室
（南から）

２．横穴式石室
（天井石　北から）

３．墳丘土層断面
（石室奥壁側　北から）

1．墓坑掘方
（奥壁裏　西から）

2．石室前庭部遺物出土状況
（南から）

3．石室羨道部遺物出土状況
（南から）

1．石室羨道部
遺物出土状況
（東から）

2．石室羨道部
遺物出土状況
（南から）

3．石室羨道部
長頸壺出土状況
（東から）

1．石室玄室部
遺物出土状況
（南から）

2．石室玄室部
遺物出土状況
（西から）

3．石室玄室部奥壁側
遺物出土状況
（南から）

1．石室玄室部
鉄釘出土状況
（南から）

2．石室玄室部
棺台石検出状況
（南から）

3．石室玄室部完掘状況
（南から）

１．積石塚全景
（西から）

２．積石塚４分割全景
（西から）

３．土坑検出状況
（積石外縁あり　西から）

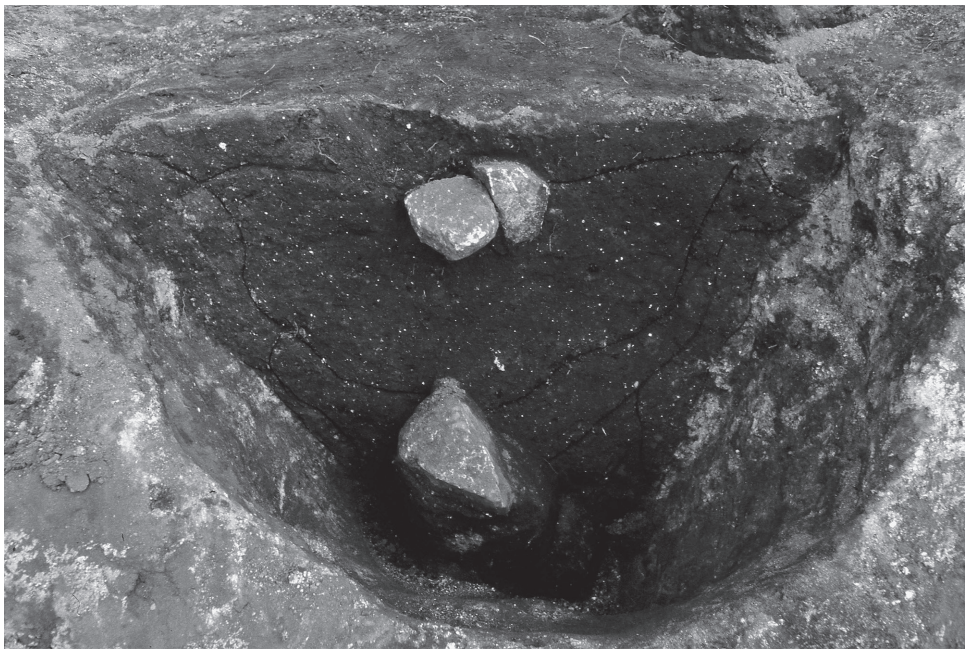
1．土坑
（礫群あり
西から）

2．土坑
（礫群あり
北から）

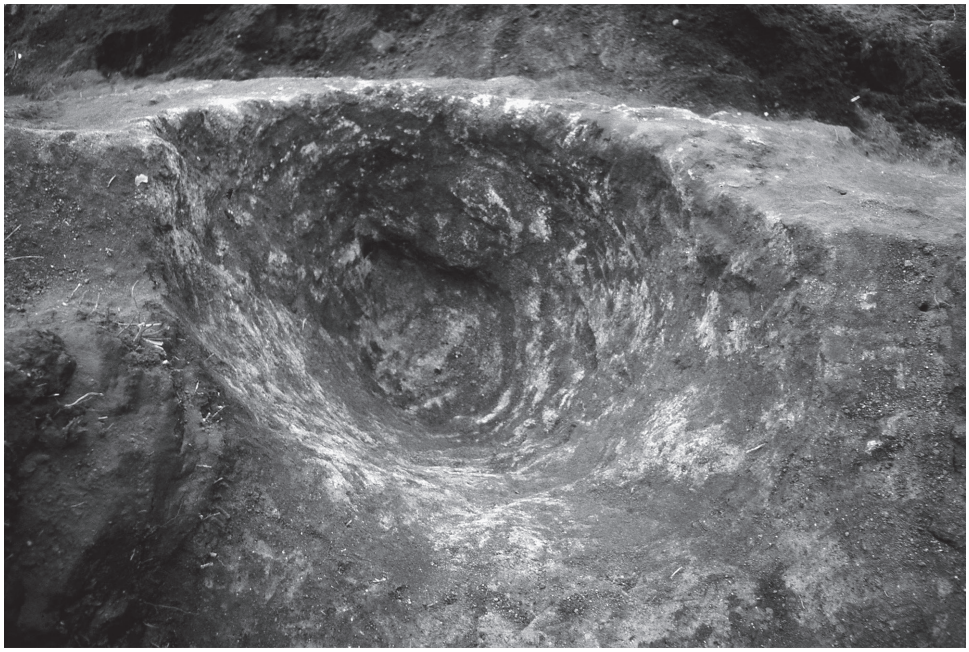
3．土坑完掘
（積石外縁あり
北西から）

1．土坑完掘状況
（東から）

2．積石下の
断割り状況
（南東から）



3．土坑１土層断面
（南から）



1．土坑１
完掘状況
（南から）

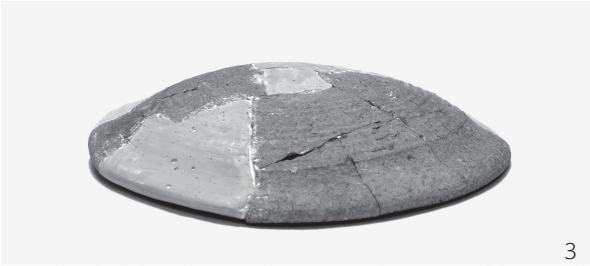
2．土坑２
完掘状況
（東から）

3．土坑２
完掘状況
（北から）

図版 13

1

2


3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

出土遺物 1

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

出土遺物 2

図版 15

25

26

27

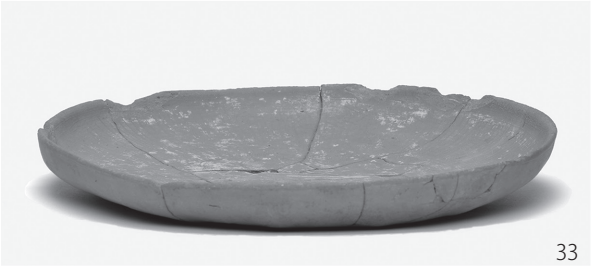
28

29

30

31

32


33

34

46

47

出土遺物 3

35

36

37

38

39

40

41

42

出土遺物 4

図版 17

43

44

45

53

54

55

56

57

出土遺物 5

48

49

50

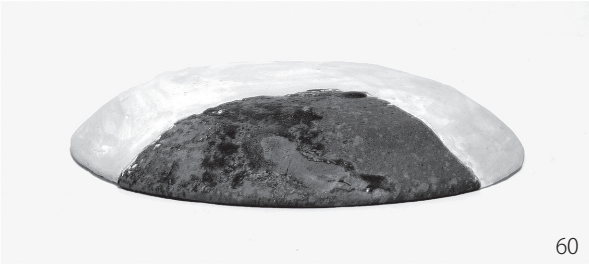
51

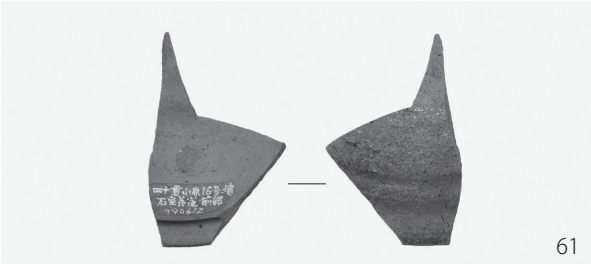
出土遺物 6

図版 19

58

59

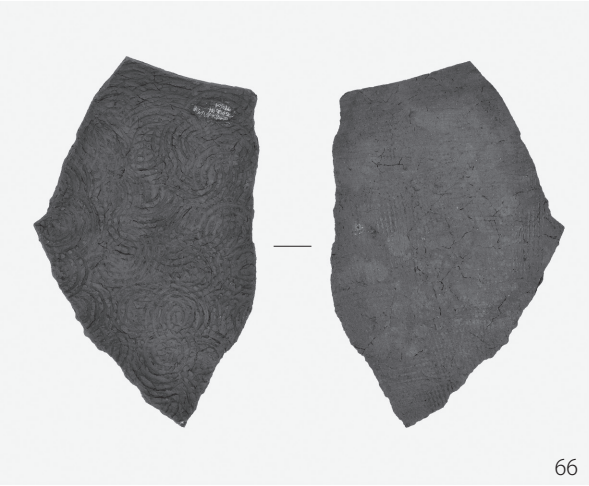

60


61

62

63

64


66

65

出土遺物 7

69

70

71

72

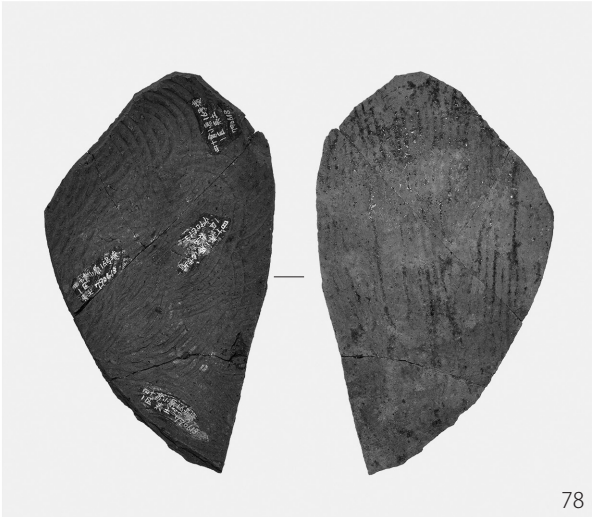
73

74

75

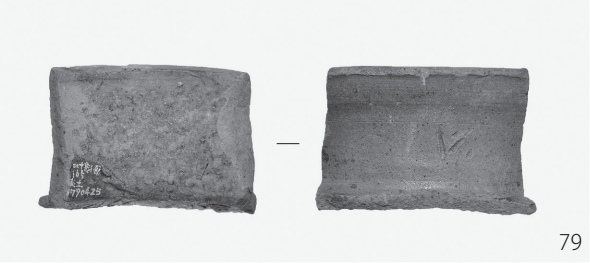
76

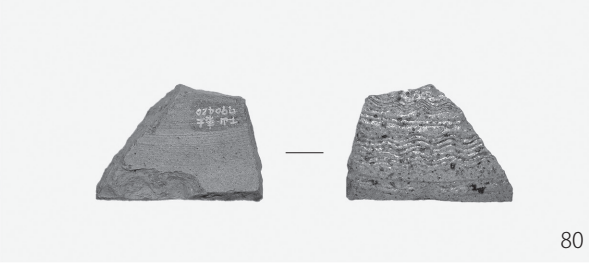
77


78

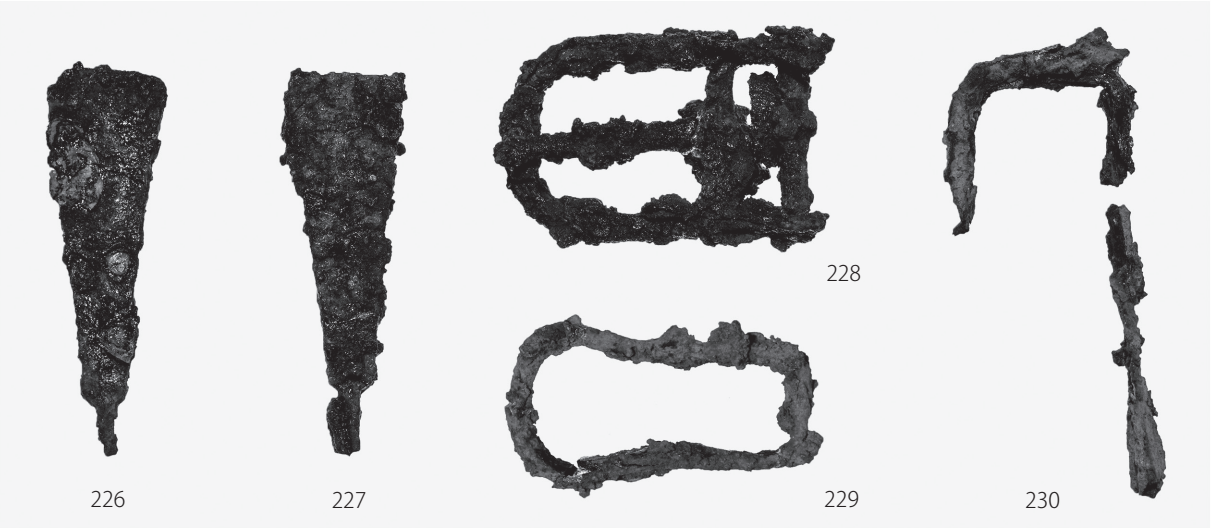
出土遺物 8

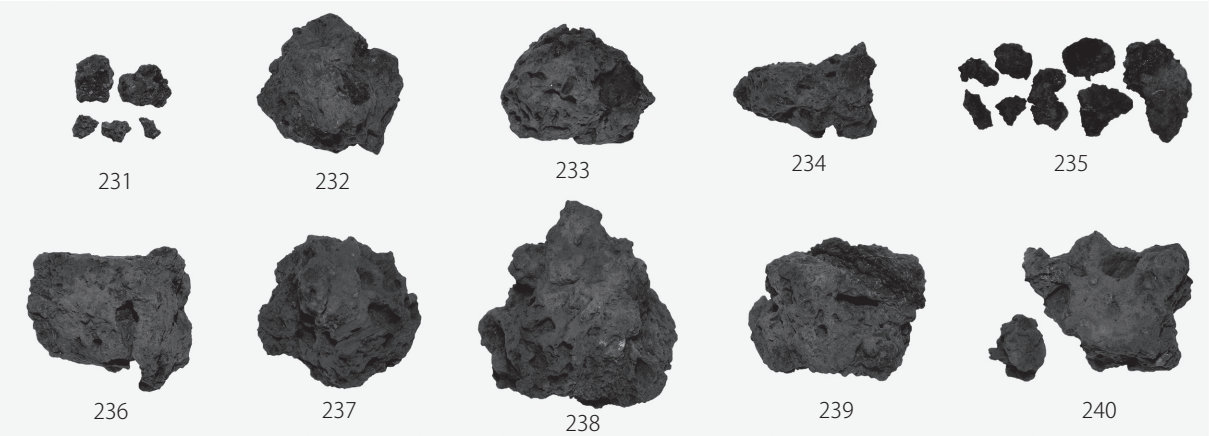
図版 21


79

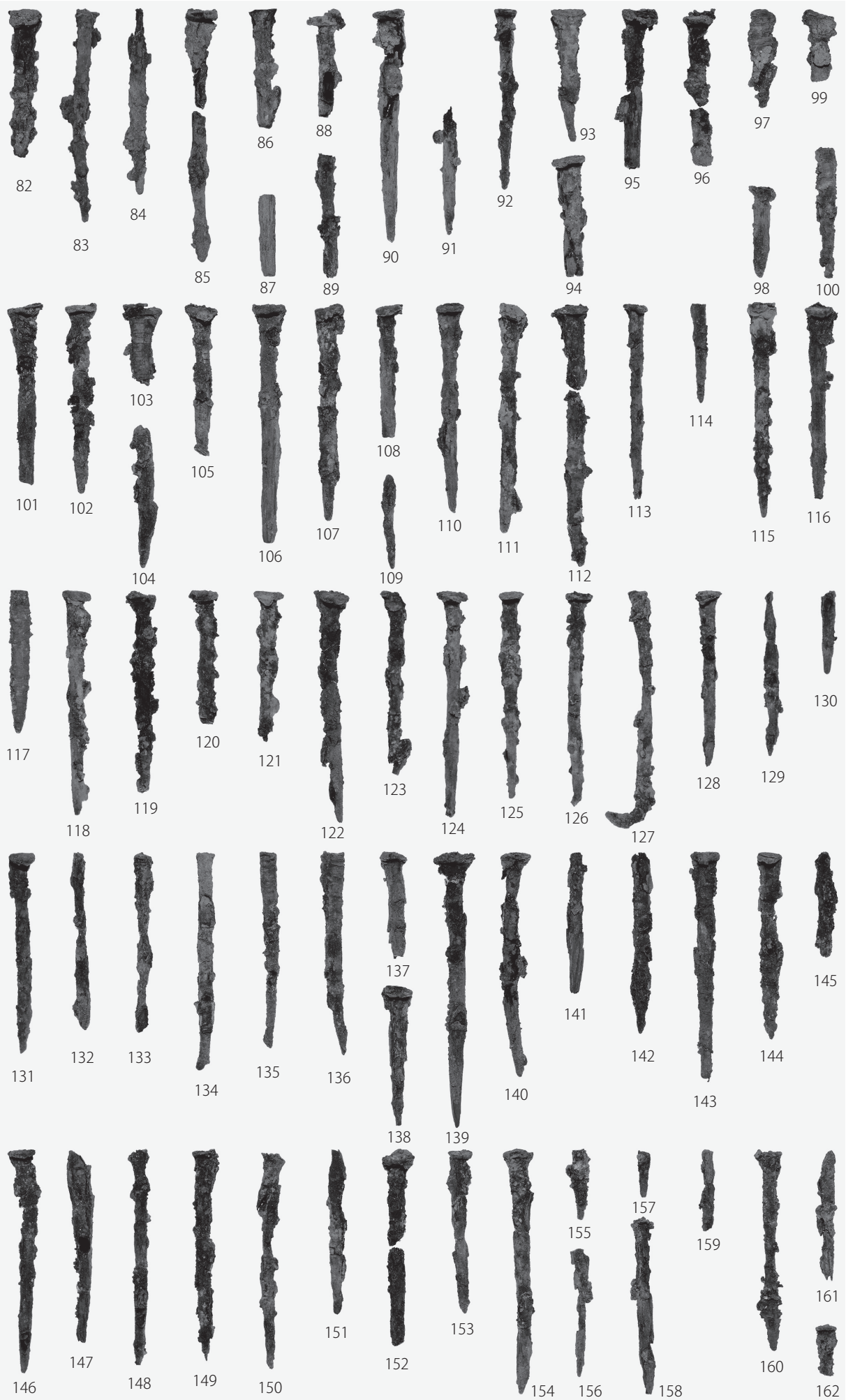

80

81


226
227
228
229
230


231
232
233
234
235
236
237
238
239
240

出土遺物 9


82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162

出土遺物 10

図版 23

163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225

出土遺物 11

報告書抄録

ふりがな	しじっかんおばらだい16ごうこふん・しもやまみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	四拾貫小原第16号古墳・下山南遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県三次市文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
著者名	中村芳昭・桑原隆博・加藤光臣
編集・発行機関	三次市教育委員会
所在地	〒738-8501　広島県三次市十日市中二丁目８番１号　℡(0824)62-6191
編集機関	特定非営利活動法人 広島文化財センター
所在地	〒732-0052　広島県広島市東区光町二丁目９番22丸子ビル601号　℡(082)299-7413
発行年月日	平成29(2017)年２月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
四拾貫小原第16号古墳	広島県三次市四拾貫町字下山１番地	34209		66°24′55″	133°40′00″	19790418～19790616	350㎡	記録保存調査
下山南遺跡	広島県三次市四拾貫町字下山１番地							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四拾貫小原第16号古墳	古墳	７世紀後半	横穴式石室	須恵器（杯蓋・杯身・高杯・平瓶・はそう・台付長頸壺），暗文土師器（皿・杯），鉄器（釘・鏃・馬具），鉄滓	外護列石 葺石状の石列
下山南遺跡	墳墓 落とし穴	中世？ 不明	積石塚，土坑 土坑		

要約	四拾貫小原第16号墳は，墳丘が方形を呈し，無袖式の横穴式石室をもつ古墳である。遺存状態もよく，遺物も多く出土している。時期は７世紀代と考えられる。 下山南遺跡は，積石塚で，埋葬施設と考えられる小形の土坑はあるものの，遺物は出土しておらず，時期は明確ではないが，中世の墳墓の可能性がある。また，土坑（ＳＫ１・２）は落とし穴と考えられる。
資料保管先	三次市教育委員会

広島県三次市文化財調査報告　第10集

四拾貫小原第16号古墳・下山南遺跡発掘調査報告書

発　行　日　平成29(2017)年 2月 28日
編集・発行　三次市教育委員会
〒728-8501　広島県三次市十日市中二丁目８番１号
編　　集　特定非営利活動法人 広島文化財センター
〒732-0052　広島県広島市東区光町二丁目９番22　丸子ビル601号
印　　刷　株式会社ユニバーサルポスト